

聖徒の道 10 1976

特集号「祈り」

「汝須らく謙遜なれ、さらば主なる汝の
神は手を取りて汝を導き汝の祈りに応え
ん。」
(教義と聖約112：10)





1976年 10月号

も く じ

祈り——心の扉を開く鍵.....	マリオン・G・ロムニー.....	477
十二使徒評議員会会員デビッド・B・ヘイト.....	ジェイ・M・トッド.....	481
主はなぜ祈りを定められたか.....	ブルース・R・マッコンキー.....	483
アリスのじゅうぶんの.....	アリス・ストラトン.....	489
おもちゃばこ.....		491
日がのぼる島.....	ジョアン・アンドレ・ムーア.....	492
えいえんの友.....		495
祈りと予言者ジョセフ.....	トルーマン・G・マドセン.....	497
日々の恵み.....		502
優先順位を決めて「理想のあなた」に.....	ジャネス・R・キャノン.....	504
ローカル・ニュース.....		506

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイブレー
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
L・トム・ペリー
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

聖徒の道 10月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布 5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布 5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京 0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

最近、私は「なぜ祈らなければならないのか」という質問を受けた。

なぜだろうか。それは、祈りが人生の真の目的を達成するために不可欠なものだからである。私たちは神の子である。従って、私たちには神の完き状態にまで到達する可能性が秘められているのである。救い主御自身が、私たちにこの希望を持つように励まして下さっている。

「われまたは天にまします汝らの父が完全なごとく、汝らもまた完全とならんことを」(Ⅲニーファイ12:48)

完全であられる救い主によらないで、だれも救い主の完き状態に到達することはできない。しかも救い主からの導きは祈り以外の方法では得られないのである。完全への道を昇るうえで



祈り——心の扉を開く鍵

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

私たちは完全に向かって努力するとき、
完全なる御方の導きを得られるよう、家
畜のため、家族のため、王国のために祈
らなければならない。



私たちが今積んでいるこの世の経験はひとつの踏まなければならない過程である。完全になるために、私たちは天父のみもとを離れてこの地球にやって来なければならない。そのとき、私たちの霊の眼には幕が引かれ、前世の記憶は取り去られたのである。

神はエデンの園において私たちに善悪を選ぶ自由意志を与えられた。すなわち自らの力で、善と悪の力を区別できるように、私たちをひとりこの地上に残されたのである。そしてそれは、私たちが信仰により歩み、「何にてもあれ、主なる彼らの神の命じたまわんすべてのこと」を行なうことによって、自己の高い可能性に達するか否かを見るためでもあった。(アブラハム3:25)

アダムとイブがエデンの園を追い出されて後、主がふたりに最初に授けられた戒めは祈りであった。(モーセ5:5 参照)

イエスはこの世にあって導きと教えを授けておられたとき、「常に祈るべきこと」を教えられた。(ルカ18:1)

また、ニーファイ人の群衆に向かって「汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず」と言っておられる。(Ⅲニーファイ18:19)

この最後の神権時代において、主は御自分の教会を組織される2年前、啓示によって予言者ジョセフに次のように言われた。

「勝利者たらんことを常に祈るべし。誠にサタンに打ち勝つように祈れ、また現にサタンの仕事に力を与えるサタンの僕らの手より免れんことを祈るべし。」(教義と聖約10:5)

また後に、このようにも言われた。

「われ一人に対して言うことは、万人に向いて言うなり。汝らかの悪魔に征服せられて、今居る所より立ちのかされざる様常に祈るべし。」(教義と聖約93:49)

ジェレドの兄弟の経験は、祈るべしという戒めに従わないことがどんなに重大なことであるかを劇的に物語っている。

主はジェレドの民をバベルの塔から海岸まで導かれた。そして彼らは「四年の間天幕を張って海岸に住んだ。

第四年の終りに主はまたジェレドの兄弟のところに降って、雲の中に立ちながらかれと親く話したもうた。主は三時間ジェレドの兄弟と話して、かれが主に祈ることを怠ったのを懲しめたもうた。

それでジェレドの兄弟がその罪を悔い改めて、一しよにきた者たちのために主に祈った時、主はこれに答えて仰せになった『われは汝と、汝と共に来りし者たちの罪を赦す。されどこの後汝は再び罪を犯すべからず。わが「みたま」は必ずしも常に人をはげますものにあらざることを忘るな。故に、汝らの罪悪がその極に達するまでひきつずき罪を犯さば主の前より断ち切らる。』(イテル2:13-15)

ジェレドの兄弟が犯した罪は、祈りを怠ったことであった。

前述の聖句は、「なぜ祈るべきか」という問いに十分な理由を与えるものであった。

また次にあげる聖句には、いつ、どこで、何を祈るかということについて

「汝らの妻子が祝福を受くるよう、たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ。」(Ⅲニーファイ18:21) これは救い主の言葉である。



何の制限も記されていないように思われる。

「……事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申し上げるがよい。」(ピリピ4:6)

「神は人を救う大能を具えたもうから、神に憐みを求めよ。

牧場に居る時は、あなたたちの家畜の群について神に祈れ。家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。あなたたちの敵の力を防ぐことができるように神に祈れ。一切の義しいことに敵対する悪魔を防ぐことができるように神に祈れ。あなたたちの田畑の収穫が豊であるよう、その作物について神に祈れ。……こればかりではない、あなたたちが一人で部屋に居るときも、秘密の所に居るときも、また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。」(アルマ34:18、20-24、26、27)

「汝心の中にても祈りまた声を出しても祈るべし。然り、人々の前にても祈りまたひそかにても祈り、公にても祈りまた陰にても祈るべし。」(教義と聖約19:28)

「これを以て、願わくは天の王国の来らんため、まず神の王国を出で行かせたまえ。神よ、かくして天に於ける如く、地に於ても栄光あらせたまえ。またかくして、汝の敵を征服したまえ。誉と能力と栄光とは、ときはかきはに神のものなればなり。アーメン。」(教義と聖約65:6)

祈りは、神と交わるための心の扉を開く鍵である。

主は次のように言っておられる。

「見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。」(黙示3:20)

同じような約束を、イエスはニーファイ人に与えておられる。

「汝らが必ず受くと信じて、わが名

によりて御父に乞い求むるものは、その正当なるものなる限り、すべて汝らに与えらる。」(Ⅲニーファイ18:20)

この最後の神権時代に住む私たちに与えられた約束は、次の通りである。

「何にてもわが名によりて御父に願うところ汝らのため必要なることは汝らに与えらるべし。」(教義と聖約88:64)

聖典には、このような約束が成就されることを示す証拠が数多く記されている。

イノスは祈ることによって罪の赦しを得ている。(イノス4、5参照)

また、父アルマは祈りによって天の使いを息子アルマのもとに送り、アルマを悔改めに導いた。(モーサヤ27:14参照)

予言者ジョセフ・スミスもまた祈りによって御父と御子の訪れを受けた。

(ジョセフ・スミス2:14-17参照)

祈りは、開拓者の作物を守るために湖からかもめを呼んだ。

祈りが皆このような目を見はるような形で答えられるわけではないが、心からの熱烈な祈りはすべて主のみたまにより聞き届けられ、答えられるのである。

祈りに対する答えは主がオリバー・カウドリに示された方法で与えられることが最も多い。主は次のように言われた。

「誠にまことにわれ汝に告ぐ、汝もしこの上に証詞を得んと欲せば、これらのことの真理を悟らんとし汝が心の中にわれに向いて呼びし夜のことを深く思うべし。

われ汝にそのことに就きて心安かれと告げしにあらざや。汝、神よりの証詞より大いなる証詞をいずこに得るや。」(教義と聖約6:22-23)

この最後の神権時代、主は私たちすべてに「われに求めなば与られ、叩けば汝ら開かることを得ん」という約束を与えられた。主はこの約束を7つの啓示(教義と聖約6:5、11:5、12:5、14:5、49:26、66:9、75:27)の中で繰り返し、一句違えず述べておられる。

教義と聖約88:62-64にはさらに次

のようにある。

「われ誠に汝らに告ぐ。わが友よ。われこれらの言を汝らに残すは、われ近きにある間に汝らわれを呼べと言うわが与うる誠命を汝らが心の中に思い廻らすためなり。

すなわちわれに近づけ、さらばわれ汝らに近づかん。熱心にわれを求めよ。さらば、汝らわれを見出さん。求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かることを得ん。

何にてもわが名によりて御父に願うところ汝らのため必要なることは汝らに与えらるべし。」

私はこれらの約束が真実であることを証する。また、これらの約束が真実であることを知っている。

私はまた、祈りが答えられることを知っている。ニーファイやイノスと同じように、私は「善い」父母から生まれた。そしてまだ幼い頃から、毎日、朝に夕にベッドの傍らにひざまずいて天父に日々の恵みを感謝し、また続けて導きとみ守りをたまわるように祈ることを教わった。それ以来、私はこの祈りを欠かしたことはない。

祈りが答えられたことといえば、子供のときに失くしたおもちゃを見つけたこと、少年のときに茂みに迷い込んだ牛を見つけたことがあげられる。私は、主がオリバー・カウドリに向かって言われたその気持ちをこれまでの経験を通してよく知ることができた。主は次のように言われた。

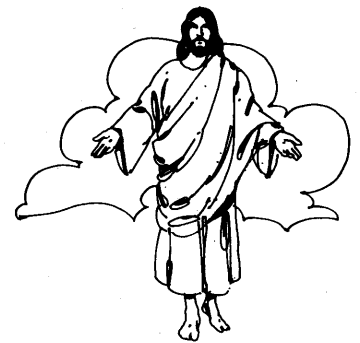
「われ汝にそのことに就きて心安かれと告げしにあらざや。」(教義と聖約6:23)

主はまたこのようにも言っておられる。

「されど見よわれ汝に告ぐ、汝心の中によく思い計り、その後願うこともし正しからば汝願わざるべからず。願うこと正しからば、その時われ汝の心を内に燃やさん。これによりて汝にその正しきを感じしむ。

されどもし願うところ正しからずば、かかる感なくして汝の心は次第に鈍くなり、そはついに悪の悪たるを忘れしむるに至らん。」(教義と聖約9:8、9)

「主の御名を呼びてこの世に神の王国を来らせ、世に住める人々をしてこれを受け、来るべき時代の備えを為さしめよ。その時、人の子は地上に建てらるべき神の王国にかなうため、彼の栄光に輝く衣を召されて天の中より降りたもうべし。」(教義と聖約65:5)



私は、イノスが何を意図して「主の御声が私の心に聞えて仰せになった」(イノス10)と言ったのか知っている。私はこの方法によって祈りの答えを受けたことがある。

「およそ信仰を以てわが名によりて……願う者は、悪霊を追出し、病める者を医し、盲目の目を開け、みみしに聞かせ、啞に物言わせ、あしなえに歩くことを得しめん」(教義と聖約35:9)とあるように、私はこの主の約束が成就するのを目にしてきた。

私はモロナイの約束を実際に試し、その祈りの答えとしてモルモン経が真実なものであるという神の証を得た。私はまた「誠心誠意でその上キリストを信じながら」問うならば、「聖霊の力によって一切の事の真実」であるかどうかがわかることを知っている。(モロナイ10:4、5参照)

祈りは神と交わるために心の扉を開く鍵であることを、私は心から証申し上げる。



十二使徒評議員会会員 デビッド・B・ヘイト長老

「エンサイン」編集長

ジェイ・M・トット

過去6年間十二使徒評議員会補助を務めたデビッド・B・ヘイト長老は、スペンサー・W・キンボール大管長より、十二使徒評議員会会員に召された。これは、昨年ヒュー・B・ブラウン長老の死去により生じた空席を満たすものである。

ヘイト長老は、1月8日木曜日、ソルトレーク神殿において、聖なる使徒職に聖任された。1975年12月2日のブラウン長老の死去以来、約5週間後のことである。

アイダホに生まれ育ったヘイト長老は、成人してからの大半をカリフォルニアで過ごした。卓越した理解力、指導力、経営に関する専門知識を備えたヘイト長老の名は、カリフォルニアの実業界、政界、教会内部に知れわたっている。

1970年4月6日、十二使徒評議員会補助に召された彼は、以来毎週各地で開かれる教会の大会に出席し、神権指導者にその召しを達成する方法を説いてきた。その手腕は高く評価され、会員たちの愛と尊敬を集めている。

「私は、組織を非常に重視しています。そして、教会員、それもすべての教会員が神の王国の建設における各自の役割を理解するようにと願っています。ステーク部大会に行く私の第一の目的は、指導者が各自の大切な役割を理解できるようにお助けすることです。ステーク部長会、高等評議員会、監督との集会で、私は終始黒板を使って話を進め、いろいろな事柄と一緒に話し合います。そして、教会の組織が実際にいかにか合理的かつ効果的かをわかってもらうのです。また大管長会の要請通りに諸活動を運営し、教会の提案して

いるように組織を整えるならば、組織は人々の生活にどのような影響を及ぼすかについても理解してもらいます。すべての事柄が現在どのような状態にあり、またどのように行なわれているかについても知ってもらえるようにしています。さらに、指導者が正しく組織を整え、各自の責任を遂行するときに、人々にどれほど恵みがもたらされるかについても理解してもらいます。」

地方の大会で指導者を鼓舞したヘイト長老は、大会が終わると、再び教会本部に戻り、家族のもとに帰る。彼は家族を限りなく愛している。ヘイト長老と夫人のラビー・ヘイト姉妹は、今年、結婚46周年を迎える。夫妻には3人の子供がおり、いずれもすでに家庭を持っている。ソルトレーク・シティーに住むジョン・M・(カレン)ハンツマン夫人、カリフォルニア州メンロパークに居を構えるデビッド・B・ヘイト・ジュニア氏、ユタ州サンディーのロバート・P・ヘイト氏の3人である。

「息子のロバートは監督をしています。彼に電話して、『毎日どうしてるかね』と尋ねるのが私の楽しみです。『ええ、ワード部であれこれ片づけなくてはならないことがありまして。』こうした返事が返って来たら、私は、『それもいいが、教会の意向は、まず家族を第一にすることだよ』と言います。」

*私はよく指導者にこのように言います。『皆さんは立派な監督やステーク部長になれるでしょう。でも注意を怠れば家族を失いかねません。』皆さん御存知のように、予言者は次のように

言っています。『いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない』と。これはまさに真実です。私たちは皆、指導者としてまた会員として、家族と教会に対する自己の務めと責任を知る必要があります。また、こうした責任を果たすに自分自身にも他の人々にもどれほどの恵みがもたらされるかについても理解すべきです。

もうひとつ、私が人々と接するとき、また共に働くときに心掛けていることがあります。それは、自分のことはさておいて、他の人々のことを気遣い、奉仕することによって、自分の生活がどう変わるかを理解させるよう、努めていることです。私は、エマソンの随筆の一部を常に大切に心に留めてきました。『指輪や宝石は贈物ではなく、贈物の単なる代用品に過ぎない。』本当の贈物はただひとつ、自らを捧げることです。奉仕は福音の骨子をなすものです。最も大切な律法についての問いに対する救い主の教えの中に、それが美しく説かれています。ある学者の説によると、当時ユダヤ人は、穀物の植え方、収穫法、野菜の洗い方など、生活に関連して613の律法と規則を定めていたということです。これらすべての中で、『どのいましめが一番大切なのですか』と彼らは救い主に問うたのでした。すると救い主は、彼らの言わんとしていることを何もかも見抜いた上で、こうお答えになりました。『一番大切な第一のいましめは、主を愛することである。第二もこれと同様である。あなたの隣り人を愛せよ。』(マタイ22:35-40参照) 奉仕なくして、完全にこの戒めに従うことはできません。主を愛する者は、主のみ業とその

成功を氣遣うことでしょう。また隣人を愛する者は、自分の隣人、友人、知人、夫、妻、子供たちを気にかけることでしょう。こうした心遣いが奉仕という形となって表われるのです。なぜでしょうか。それは、その人たちのために何かをしようとするからです。主が計画全体の中に奉仕を組み入れたもうた理由はここにあります。」

十二使徒評議員会の一員として新たに召されたヘイト長老の最大の魅力は、ごく自然にまた容易に彼の口をついて出るこうした気持や考え方が、単に頭の中にとどまることなく、生活の中に実際に表われていることである。ヘイト長老は、様々な状況と環境の中で福音の原則を培い、試した末、69歳でこの新しい責任に召された。「福音は生きています。確かに福音は生きています。」率直にまた心を込めて語るヘイト長老のこの言葉を聞く人は、彼が経験により語っていることを知るのである。

彼の経歴は、実に変化に富んでいる。1906年9月9日、アイダホ州オークレに誕生した彼は、その小さな町で成長した。祖父は、アイダホ州カッシアステーク部の初代ステーク部長であった。また父（ヘイト長老が9歳のときに死去）は町の銀行家であり、アイダホ州上院議員、ワード部監督を務めた。十代で教員免状を取得した青年デビッド・ヘイトは、十分な学資を得て大学に進学し、22歳でユタ州立大学経営管理学科を卒業した。そして2年後、ラビー・オルソンと結婚、夫妻はその足でカリフォルニアに車を走らせ、ヘイト長老は、ある百貨店の新しい支店を管理することになった。

彼は商取引の管理に大いにその手腕を発揮した。そして4年後、ソルトレーク・シティーに行き、ある大百貨店の雑貨部門の支配人となった。さらにその後、カリフォルニア州サンディエゴにあるモントゴメリー・ウォード（大チェーンストア）で、25の店の経営を監督した。次いで、カリフォルニア州北部のオークランドに移り、地区支配人として働いたが、第二次世界大戦によって中断された。戦時中は合衆国

海軍士官に昇進し、太平洋地域の後方業務および戦略行動を監督、正確な時間に正確な場所へ物資を補給する指揮をとった。その采配ぶりは人々から大きな賞賛を浴び、軍部も正式にその功績をたたえるところとなった。終戦後、モントゴメリー・ウォード社に戻ったヘイト長老は、シカゴ地区支配人として165の店と、何千人もの雇用者の監督にあたった。1951年、45歳の年に、かねてから描いていた経営概念を実行に移すことを決意し、カリフォルニア州パロアルトに金物店を開いた。

パロアルト在住中、高等評議員の職からステーク部長に召された。またその在任中、市議会出馬の要請があり、パロアルト市長を2期務め、スタンフォード大学付属パロアルト病院長に任命されるに至った。また実業界、経営管理層、大学の各指導部の中にあつて公民として多くの奉仕を行なってきた。

様々な状況の下で福音の概念を試してきたヘイト長老は、他の人々も同じような成功を収めることができるよう助ける準備が整っていた。そして、デビッド・O・マッケイ大管長よりスコットランド伝道部の伝道部長に召されるのである。その後、神権伝道委員会の委員となり、続いて十二使徒会地区代表を務め、1970年に十二使徒補助に召された。十二使徒補助在任中、ヘイト長老はユタ州プロボに移り、3年間ブリガム・ヤング大学のアーネスト・L・ウイルキンソン総長の補佐を務め、主に大学基金プログラムの確立に尽力した。

ヘイト長老に使徒の召しが申し渡されたのは、1月8日木曜日午後2時頃であった。「ある集会に出席しているときに、私の秘書が電話を受け、キンボール大管長が私に会いたいとのことでした。大管長にはすぐ折返し電話をかけることにしていたので、部屋を出て、秘書の書きつけ通りにダイヤルを回しました。その電話がどこに通じるのかわかりませんでしたが、キンボール大管長が出て、次のように言われました。『ヘイト長老、私は今神殿内にいます。大切な用件でお話したいので、至急お出で願えませんか。』 神殿に向

かう途中のことを私は生涯忘れないでしよう。ステーク部大会で大変な失言でもしてしまったのだろうか。メルケゼデク神権部のディレクターとしての働きが足りなかったのだろうか。いろいろな思いが私の脳裏をかすめました。けれども十二使徒の空席を埋めるなどとは思ってもみませんでした。教会には、この召しを受けるにふさわしい立派な人が大勢います。私は一度も教会の地位を望んだことはありません。本当に一度もありません。キンボール大管長は神殿に着いた私を部屋に招き入れ、召しのことを告げられました。私はあのときの経験を決して忘れることはありません。

若い頃アイダホにいた私は、世の偉大な神学者や思想家はこの教会や末日聖徒をどう見ているだろうか、とよく心を煩わせたものです。私は、彼らが人間について素晴らしい寛大な考え方を持っており、人間性にも富んだ人々であることを認めていました。しかし、長年実業界や軍や大学で多くの立派な人々に会い、共に働き、語らい、彼らを観察してきた私は、若い頃わずかに心に掛かっていたことが、実は何の根拠もないことがわかりました。ほかの人々は私たちよりはるかにすぐれた考え方を持っていると考えていましたが、実はそうではありませんでした。私は自分が見聞きし、経験した事柄をもって皆さんに申し上げます。すべてを具えておられる御方は主御一方であると。主は、私たちが幸福を得るために必要な素晴らしい概念、真理、喜び、組織、計画、ビジョンをすべて持っておられます。このことを証できることは喜びです。私が福音についてどのように感じているか、また人々を救い、永遠のビジョンを抱かせるこの偉大な栄えある責任をいただいて、どのような心持ちでいるかを、皆さんにおわかりいただきたいと思います。これに匹敵する栄誉ある責任はこの地上にはありません。何ひとつありません。主とその御計画こそ、私たちに解答を与えてくれるのです。」

主はなぜ祈りを 定められたか

十二使徒評議員会会員

ブルース・R・マッコンキー

ソルトレーク神殿にある十二使徒評議員会の部屋の西側の壁に、主イエスがゲッセマネの園で御父に祈っておられる場面を描いた絵が掛かっている。

この園で私たちの主は、たとえようのない苦しみの中に、御父に向かい、限りない永遠の贖いを完成させるための強さを下さるようにと嘆願されたのである。主は、肉体的にも霊的にも、人知の及ばぬ苦しみを受けられた。その苦しみは、やがて来る十字架上の死の苦しみをも、取るに足らないものとするほどのものであった。

これまでささげられた祈りの内で、また今後ささげられる祈りの内で、それをささげる者が神々にせよ、天使にせよ、あるいはまた人にせよ、およそこの祈りの右に出るものはない。他のいかなる祈りにも増して、崇高で気高く、また秀でた祈りである。

エルサレムの城壁の外にあるゲッセマネという名のこの園の中で、アダムの種族の中で最も大いなる御方、そして思いも言葉も完全であった御方が、人にとっても神にとっても最も過酷であるこの試練に勝利を収めさせて下さるよう、御父に嘆願されたのである。

そのオリーブの木立の中で、汚れない礼拝と完全な祈りの精神で、マリヤの御子は、人として生まれた者に課せられた最大の重荷に耐えながら、苦しみもだえた。

そのユダヤの夜の静寂しじまの中で、祈りを口にしながら眠ってしまったベテロ、ヤコブ、ヨハネを傍らにおき、神の御子は、あらゆる人の罪を悔改めという条件の下でその身に引き受けられた。

大いなるエロヒムは、キリストを信じそのみ顔を求める、あらゆる時代のあらゆる人々のあらゆる罪のあらゆる重荷を、そのとき、そこで、苦しみ悩む僕に委ねられた。そして、御父の生き写しであった御子は、御自身が地上に降臨されたその第一の目的を完成させるために、必要な力を求めて天の御父に祈られたのである。

永遠という時の流れがどちらの方向に進んで行くかは、いつにこの時にかかっていた。人の罪によって産み出された苦悩は余りにも大きく、それがいささかの罪も知らない主の上に重くのしかかってきたために、主はあらゆる毛の

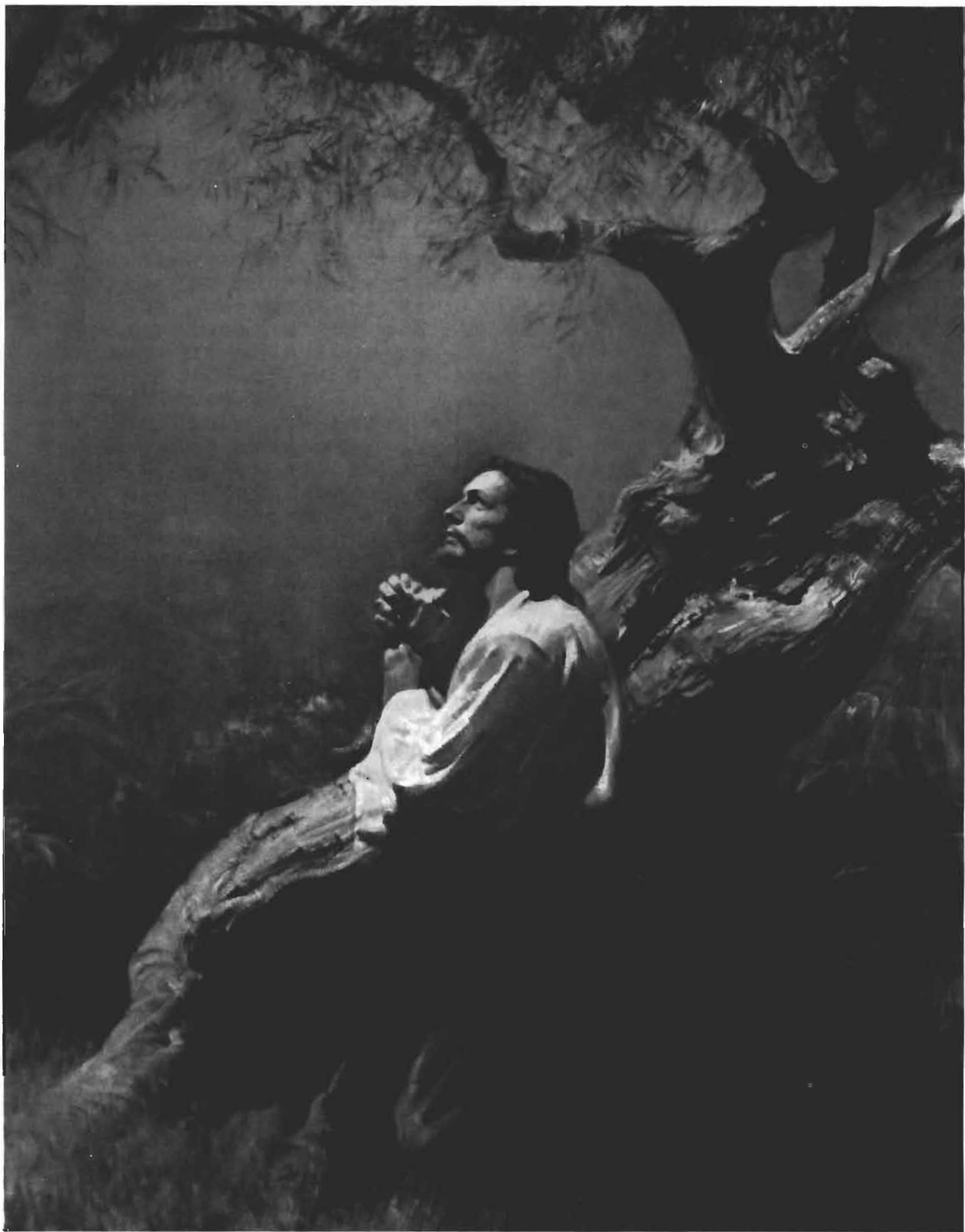
孔から汗のように血を滴らせ、心の中で「この苦きさかずきより吞まず」に、それで「可ならんことを欲した」（教義と聖約19：18）ほどであった。天地創造の夜明け以来この崇高なときまで、そして、この贖いの夜から限りない永遠の未来にわたって、このときほどの苦悩が存在したこともなければ、今後存在するはずもないのである。

「現在この世を治めたまい、また無限の過去から無限の将来に亘ってまします全能の主」は「天から人間に降臨」（モーサヤ3：5）した。主は、時の初めより、あらゆる物の創造主であり、支持者であり、保護者であった。また、土くれを幕屋としておられた。主は、この世でただひとり、神を父として生まれた御方であった。正に神御自身の御子であった。主は、人知の及ばない方法で、直ちに、限りない永遠の贖いの業を成し遂げられた。その結果、あらゆる人々は不死不滅となってよみがえり、さらにまた、信じて従う人々はよみがえって永遠の生命を受け継ぐのである。贖い主なる神は、アダムの墮落によってもたらされた肉体と霊の死から、全人類を贖いたもうた。

そして正にこのとき、自ら（犠牲の）血を流しながらも、主は、かつて人のささげた祈りの中で最も強く心に響く祈りを、身をもってささげたもうた。御子なる神は、父なる神に向かって祈られたが、それは御自分の思いが、御父のみここに合致するよう祈られたのである。御子は、御自分が贖い主として選ばれたときに御父と交わした約束を果たしたいと切に望み次のように言われた。「父よ、御旨の成らんことを、栄光とこしえに父にあれ」（モーセ4：2）

誠に、従順な御子のただひとつの望みは、自分を遣わされた御父のみところを行なうことであった。そのために私たちの主は、人としての生涯を送っていた間中、絶えず祈っておられた。イエスは、その父である神から、いまだかつて持ち合わせた人がいないほどの偉大な知性と霊的な洞察力とを受け継いでおられた。しかし、そのような偉大な力と賜があるにもかかわらず、なお祈りの必要性を感じておられた。いやむしろ、偉大な力と賜を持っていたが故に祈られたと言う方がよいであろう。というのも、誠に人は、霊的に完全になればなるほど、また知的な賜を与えられれば与えられるほど、祈りの必要性を深く認識するようになるからである。物事の無限の計画の中で、自分の立場を認識している人は、その立場を知ることにより、同時に無限無窮の神から導きを受ける必要があることも知るのである。同様にイエスも、他のだれにもまして、あらゆる力、あらゆる英知そしてあらゆる善の源である御父と絶えず交わることの必要性を強く感じておられた。

キリストは、その伝道中、十二使徒を選びたもうた。この人々は、特別の証人となる人たちであって、「地の極まで」（教義と聖約109：23）キリストとその律法について証し、イスラエルの全家の裁きのときにキリストと共に12の王座に座るはずの人々であった。では、この人々を主はどのようにして選ばれたのであろうか。聖書には、「イエスは祈るために山へ行き、夜を徹して神に祈られた」と記さ



れている。こうして、御父の思いとみこころを知るに至ったイエスは、「夜が明けると、……十二人を選び出し、これに使徒という名をお与えになった。」(ルカ 6:12、13)

主の逮捕と受難が間近に迫ったとき、十二使徒たちの心に強く刻んでおかなければならない偉大な真理が、もうひとつ言い残されていた。それは、使徒たちが割り当てられた責任を立派に果たし、キリストや御父と共に永遠の報いを受けたいと望むならば、キリストと御父がひとつであるように、彼らもひとつとならなければならない、ということであった。この極めて大切なときにあって、主は、偉大なとりなしの祈りの中で、この真理を教えられたのである。その断片は、ヨハネによる福音書第17章に書き記されている。

主は、復活後もなお御父に祈られた。注意していただきたい。これは復活後のことである。このとき、主はすでに栄光を受け、完全な者となっておられたが、ニーファイ人にも並々ならない霊的な経験を与えたいと考えられた。そして主はそれを説教によらず、祈りによって与えられた。「その祈りは書くことができない」と、記録にはあるが、その祈りを聞いた人々は次のような証を立てた。

「私たちが見たり聞いたりしたイエスの御父に対するお祈りは、人の目がまだ見ず、耳がまだ聞かないほど偉大で驚嘆すべきものである。

これを口で言いあらわせる者もなく、筆で書きあらわせる者もなく、また人間の心で想像できぬほど偉大で驚嘆すべきものである。イエスが、私たちのために御父に祈って居りたもうのを聞いたとき、私たちの心に満ちた喜びは人間の想像ができないものである。」(Ⅲニーファイ 17:15-17)

しかしここゲッセマネでは、主は、苦しんでいる人、重荷を負っている人、悩んでいる人全員のために、その模範として、全身全霊を傾けて御父に祈られたのである。主がどのような嘆願をされたか、どれほど深い表現で祈りをささげられたか、またどれほど栄光と礼拝に満ちた言葉で語られたか、私たちは知る由もない。恐らくニーファイ人の間でささげた祈りと同様、ゲッセマネの園での主の言葉も書き表わすことのできないものであったと思われる。それは、みたまの力によってのみ理解できるものであったのだろう。ただ私たちが知っているのは、3度にわたって祈りをささげ、心の中の思いを打明けられたということである。「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにではなく、みこころのままになさって下さい。」(マタイ 26:39)

このゲッセマネの園で、主が御父に向かい「わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください」と言われたとき、聖書の記述によれば「御使が天からあらわれてイエスを力づけた。

イエスは苦しみもだえて、ますます切に祈られた。そして、その汗が血のしたたりのように地に落ちた。」(ルカ 22

:42-44)

ここに驚くべきことが記されている。よく注目していただきたい。神の御子が「ますます切に祈られた」のである。あらゆる事柄を見事に成し遂げた御方、その言葉がごとごとく正しかった御方、その強調するところが極めて適切であった御方、御父からみたまをあふれんばかりにいただいた御方、地球という惑星の埃っぽい道を歩いた者の中でただひとり完全であった御方。そのような神の御子が「ますます切に祈られた」のである。主は私たち兄弟姉妹に、主の祈りも含めて、すべての祈りが同じ祈りであるようにとは教えられなかった。むしろ、大きな必要性を感じればそれだけ、ますます切に、また深い信仰に満たされて神に願うものである、と教えて下さった。

私たちは、祈りの律法についてよく学び、それに従って生活したいものである。そうすれば、主と同じように、私たちも主と御父のおられる所へ行くことができる。では、この目標を念頭に置き、祈りという栄えある特権の具体的な内容を要約してみよう。そして、いかに大胆に、またいかに効果的に祈るべきかについて学び、言葉だけでなく、思いと力とを込めて祈るようにしようではないか。そうすれば私たちも、キリストのように、天の軍勢を自分たちのもとへ引き寄せることができるのである。恐らく、次に挙げる10項目は、私たちが考えていることを具体化する上で助けになることであろうし、また私たち自身の祈りを完全なものにする上でも指針を与えてくれることであろう。

1. 祈りとは何か

かつて私たちは御父と共に住んでいた。そのみ顔を拝し、そのみこころを知っていた。御父に話しかけ、そのみ声を聞き、御父から助言と指導を受けていた。これが、霊の子供であった私たちの前世における状態である。そのとき、私たちは見えるものによって歩いていたのである。(Ⅱコリント 5:7)

しかし現在私たちは、神のみ前から遠く引き離されている。もはや昔のように、そのみ顔を拝することも、そのみ声を聞くこともない。現在、私たちは信仰によって歩いている。しかし私たちは、昔同様、否それ以上に、神の助言と指導を必要としている。世が造られる前、天のあらゆるみ使いたちと交わっていた頃に比べ、はるかに必要なのである。限りない先見の明により、私たちに何が必要になるかを知っておられた愛の深い御父は、私たちが御父と交わるための手段として、祈りを備えて下さった。私は次のように書いたことがある。

「祈ることは、それを声に出すにせよ、心の中にその思いを抱くにせよ、神と話すことである。通常祈りには、賛美と感謝と礼拝の表現が含まれている。祈りは、神の子供たちが永遠の御父に向かい、現世的にも霊的にも必要なものを求めて願う厳粛なときである。様々な試練に満ちたこの世の生活を送るにあたって、自分たちを支えるために必要であると感じるものを求めて祈るのである。祈りは告白のときである。心から謙遜になって、へりくだった心と悔

いる精神とを持った聖徒たちが、その罪を神に告白し、完全な赦しを得るために哀願するときである」 (Mormon Doctrine 「モルモンの教義」 p. 581)

2. なぜ祈るのか

なぜ祈るのかという点に関して、根本的な理由が3つ挙げられる。

a. 祈ることは戒めである 祈りとは、人の気まぐれによって、祈りたくなったから祈るといった類のものではない。これは神の永遠の律法である。「汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし」と、神は最初の神権時代に言われた。「アダムとその妻イヴとは神を呼ぶことを止めざりき」(モーセ5:8、16) 私たちの時代においても、「求めよ、さらば与えられ、叩けよ、さらば開かるることを得ん」(教義と聖約4:7)と教えられている。教会のホームティーチャーには、「各会員の家庭を訪れ、彼らが声を挙げてみよひそかにても祈りをなす…よう勧め」(教義と聖約20:47)る責任が与えられている。また主は「誠命」という言葉を使って、末日の民に次のように言っておられる。「およそ、祈るべき時にわが前に祈りをなすことを守らざる者は、わが民を審く者の前に覚えらるべし」(教義と聖約68:33)

b. 正しい祈りがあってはじめて、物質的、霊的な祝福がもたらされる あらゆる啓示からわかるように、天の門は、信仰を持って祈る人々には広く開け放たれている。主はそのような人々には、義を注ぎ、困難な時にあっても守って下さる。そして地はその産物を生じ、福音の喜びは心に宿る。

c. 祈りは、救いに不可欠である 責任をとる能力のある人はだれでも、王国の造り主と交わるすべを知らない限り、日の光栄の王国において安息を得ることはできない。また「人はどうしてもまだ仕えたこともなく、見も知らず思いもかけない主人を知ることができようか」(モーサヤ5:13)とも言われている。

3. 御父に祈る

私たちは、御子(エホバ)のみ名によって御父(エロヒム)に祈るよう命じられている。啓示では、この点が極めて明確にされている。「汝らはわが名によりてたえず御父に祈らざるべからず」(III ニーフアイ18:19)と、主イエスはニーフアイ人に言われた。しかしながら、今なお、キリスト教の諸教派の間で、またときには真の聖徒たちの間でも、驚くほど大勢の人々が、偽りの教えと偽りの慣行に従っている。

また、いわゆる聖人に対して祈り、その聖人にキリストに対する取りなしを嘆願する人々もいる。様々な教派の公式の祈禱書を見ると、御父に対する祈りもあり、御子に対する祈りもあり、さらに聖霊に対する祈りもある。教派によっては、キリストのみ名によって祈りをささげるのが慣習どころか、例外とさえなっている場合がある。また、私たちの主に直接嘆願することにより、何か主と特別な関係を得ることができると感じている人々もある。

私たちが御父に祈るとき、その答えが御子から来るのは事実である。「神と人との間の仲保者もただひとりであって、それは人なるキリスト・イエスである」(I テモテ2:5)からである。例えばジョセフ・スミスは、疑問の解答を求めて、御子のみ名によって御父に祈った。それに答える声は、御父のみ声ではなく御子のみ声であった。それは、キリストこそ私たちの代弁者であり、仲保者であり、(御父の下に)この地球を治め、支配しておられる神だからである。

また時にはキリストが、御父から与えられた権能によって、あたかも御自分が御父であるかのごとくに語る特権を行使したもうことがあるのも事実である。つまりキリストは、1人称で話し、御父のみ名を用いるのである。これも、御父が御子に御自身のみ名を託されたからに他ならない。この点に関して完全な説明を求める人々は、「御父と御子。大管長会と十二使徒会とによる教義の解説」という公式の宣言を参照するとよい。ジェームズ・E・タルメージ長老の著書「信仰箇条の研究」の612ページ以降にこの宣言が掲載されている。

同様にまた、私たちやあらゆる予言者たちが、作法になくなって、主なるエホバ(キリスト)に賛美の声を挙げるのも事実である。私たちは、その神聖なみ名に対して、「ハレルヤ」という叫びにあるように、正しく賛美をささげることができる。「ハレルヤ」とは、「ヤー」をたたえる、あるいは「エホバ」をたたえるという意味である。しかし私たちが明確に理解しておかなければならないことは、私たちはいつも御父に祈るのであって、御子に祈るのではないということ、そして、いつも御子のみ名によって祈ることである。

4. 現世的な、また霊的な祝福を求めて祈る

私たちは、それが現世的なものであれ、霊的なものであれ、真に必要なものはすべて祈り求める資格があるし、またそのように期待されている。しかし無制限に嘆願する権利はない。私たちの願いは、正義に基づいたものでなければならない。「求めても与えられないのは、快樂のために使おうとして、悪い求め方をするからだ」(ヤコブ4:3)

アミュレクは、何を求めて祈るべきかということを説明するにあたって、憐みや救いの他に、作物や家畜の群れや田畑などについても挙げている。(アルマ34:17-29参照) 主の祈りの中では「わたしたちの日ごとの食物」(マタイ6:11)のことが言われているし、ヤコブは知恵を求めて祈るよう教えている。(ヤコブ1:5参照) これはつまり、原則的には、神の属性はすべて求めるべきであるということである。近代の啓示では次のように言われている。「汝らに命ず、すべて何事も……神に願うべし」(教義と聖約46:7) また、ニーフアイも次のように言っている。「自分たちの働きが自分の身も霊も救われるように天の御父がその働きを祝福したもうよう、キリストの御名によってまず天の御父に祈らないでは主の御前にどのような働きもし

てはならない。」(Ⅱニーファイ32：9) また主は、あらゆる忠実な人々に、次のような約束を下しておられる。「汝もし願い求むれば、啓示を啓示の上に受け、知識の上に知識を受け、かくて悦びをもたらし永遠の生命をもたらすべき奥義にして平和なることを知るを得べし。」(教義と聖約42：61)

知恵と正義にかなって必要と思われるものはすべて祈り求めなければならない。これは明白である。私たちは証を求め、啓示を求め、また、みたまのあらゆる賜を求めなければならない。この中には、教義と聖約93：1にある、主のみ顔を拝するという約束の成就も含まれている。しかし他の様々な願いにも増して、私たちが願い求めるべきことは、この世において聖霊と緊密な交わりを持つことであり、来世においては永遠の生命を得ることである。ニーファイ人の12人の弟子たちは「切に望むこと」として、モルモン経の記録によれば、「聖霊をかれらに与えたもうことをねがった。」(Ⅲニーファイ19：9) 人がこの世で受けることのできる最大の賜は、聖霊の賜であり、また同様に、永遠を通じて得ることのできる最大の賜は、永遠の生命である。

5. 他人のために祈る

私たちの祈りは、利己的なものでもなければ、自己中心的なものでもない。私たちは、あらゆる人が霊的な平安を得よう願っている。私たちは、御父のあらゆる子供たちのために祈る。イエスは、偉大な取りなしの祈りの中で、次のように言われた。「わたしをお願いするのは、この世のためにではなく、あなたがわたしに賜わった者たちのためです。」(ヨハネ17：9) しかし、主は同時に次のようにも命じられた。「あなたがたの敵を愛し、のろう者を祝福し、憎む者に善をなし、さげすむ者、迫害する者のために祈れ。」(欽定訳マタイ5：44)

そのため、ちょうどキリストが「すべての人の救主、特に信じる者たちの救主」(Ⅰテモテ4：10) であるように、私たちもすべての人のために祈り、特に私たち自身のため、家族のため、聖徒たち全般のため、そして、真理を信じた、知りたいと願っている人々のために祈るのである。私たちが特に関心を払うのは、「信仰ある家族」(教義と聖約121：45)の中にいる病人であり、また、回復された福音を研究している人々である。ヤコブは教会員に対して次のように言っている。「いやされるようにお互いのために祈りなさい。義人の祈は、大いに力があり、効果のあるものである。」(ヤコブ5：16) また、私たちの教会の集会に出席し、真理を探究している人々に関して、主イエスは、そのような人々が悔い改めてバプテスマを受けることを望んで、「汝らはこれがためわが名によりて御父に祈るべきなり」(Ⅲニーファイ18：23：30も参照) と言っておられる。

6. いつ、どこで祈るのか

「いつも祈らなくてはならない」(Ⅱニーファイ32：9参照) と、聖典に書かれている。これはつまり、定期的、毎日祈るということであり、また、いつも心の中に祈りの精神をもって生活するということである。そうするときに、

思いと言葉と行動は、いつも、永遠の御父から喜んでいただけるようなものとなるであろう。アミュレクは「朝も昼も晩も」祈るよう説き、また、ひとりで部屋にいるときも、秘密の所にいるときも、また野にいるときも、心にあることを主に打ち明けて祈るようと言っている。(アルマ34：17-29参照) イエスは、個人の祈りと家族の祈りを行なうように命じられた。「たえず目を覚して祈らざるべからず」「汝らの妻子が祝福を受くるよう、たえずわが名によりて家族の祈りを御父に捧げよ」(Ⅲニーファイ18：15、21)

現在の教会の慣習では、一日に2度家族の祈りを行ない、それに毎日個人的に祈り、さらに毎食事時、食物を祝福し(ただし、公衆の面前や、祈りをささげることがいかにもこれ見よがしの場合や不適当な場合は除く)、そして集会において適切な祈りをささげる。以上のことが日課になっている。

7. どのように祈るか

いつも御父に祈り、祝福に対して感謝し、現実に必要なものを求めて祈る。そして、これをイエス・キリストのみ名によって行なうのである。

時間と条件が許せば、罪の告白をし、個人的な問題について主の導きを求め、主の優しさと恵み深さを賛美する。そして、主とひとつの状態になれるように、礼拝と信義の言葉を用いて祈る。

祈りを受け入れられるものとするために、これまで見逃がされ、ないがしろにされていたと思われる、極めて大切な指針をふたつ挙げておこう。

a. 熱心に祈る 単なる言葉だけでは十分でない。いたずらに繰り返してばかりいるのも不十分である。文学的に優れた表現を用いることもさほどの価値はない。誠に、祈りにおける真の雄弁さとは、言葉の見事さにあるのではなく(無論、これも求められてしかるべきではあるが)、言葉に伴う気持にあるのである。そこに用いられた言葉がいかに稚拙であろうと構わないのである。モルモンは次のように言った。「ありたけの心をつくして御父に祈れ。」(モロナイ7：48) さらにまた、「人が真心でなく祈る時は悪い事と認められる。神はこのような祈りを聞き届けたまわぬから何の役にも立たない。」(モロナイ7：9)

b. 聖霊の力によって祈る これは、祈りの中でも極めて崇高な、また究極の到達目標である。次のような約束がある。「この『みたま』は、信仰の祈りによりて汝らに与えらる。」(教義と聖約42：14) 「汝らもしすべての罪を洗われて潔くせらるるならば、イエスの名によりて何事にまれ欲するところを願え、さらば皆与えられん。」(教義と聖約50：29) また、来たるべき福千年では、祈りは完全なものとなるが、この時代について聖典には次のように言われている。「またその日には、およそ何人の願うところもことごとく聞き届けられん。」(教義と聖約101：27)

8. 自由意志と祈りを共に用いる

いつの時代であっても、私たちが祈りによって主に願い

求めることの多少にかかわらず、あらゆる問題や懸念にことごとく答えを受け、私たちの方で何らの苦労も努力もしないというのは、主が意図するところではない。この死すべき世は、試しの生涯である。この間、私たちには自由意志がある。現在私たちは、様々な状況にどのように対応するか、またいかに物事を決定するか、さらに、見えるものによってでなく信仰によって歩いている間にどの道を進むかといったことを試されている最中なのである。それ故私たちは、自分自身で問題を解決した上で、祈りによって主に助言を求め、それで自分の決定が正しかったという霊的な確信を受けるべきである。

ジョセフ・スミスが、モルモン経の翻訳の仕事に着手したとき、彼は、金版上の文字が何という意味なのか、ただ単に主に尋ねるようなことはなかった。むしろ、彼に求められたのは、心の中でそのことについてよく思いはかり、自分自身で決定を下し、その上で、その結論が正しかったかどうかを主に尋ねるということであった。(教義と聖約9:8、9参照) 私たちの召されている仕事でも皆同じである。祈りと努力は一体のものである。私たちが自分のできる限りのことをし、その後、力強い効果的な祈りによって主に指導を仰ぐようにすれば、私たちにも、正しい結論を導き出せる力が身につくのである。

9. 祈りの諸形式に従う

祈りの形式は(数は多いが)単純かつ平易であって、真心からの効果的な祈りとは不可分である礼拝の精神を高める上で、一助となるものである。私たちの御父は、すでに栄光を受け、昇栄された御方である。また全知全能の御方でもある。それに比べれば、私たちは、地上のちに等しい存在である。しかしながら、私たち神の子供たちは、祈りを通じて、神に近づくことができる。祈るときに、神に対する尊敬の念を増す気持を起こさせる行為は、皆良いものである。

私たちは、祈りの中で聖きみたまの導きを求める。また心の中で、永遠の厳肅さについて思い巡らす。畏敬と尊崇と礼拝の精神で神に祈りをささげ、静かに、また厳かに話しかける。そして、その答えを耳を傾けて待つ。私たちは最も望ましい状態で祈り、神のみ前にいるのである。

それ故私たちは、ほとんど無意識のうちにこうべを垂れたり、目を閉じたり、腕を組んだり、ひざまずいたり、ぬかずいたりする。神聖な祈りの言葉を用い、だれかが会衆を代表して祈るときには、アーメンと言う。こうして、会衆の思いも自分の思いも、また会衆の祈りも自分の祈りもひとつのものとなるのである。

10. 祈りを実践する

「できそうもないことを祈るな」という、古いことわざがある。これは、祈りと行ないは不離一体の関係にあるということである。そして、私たちの行ないは、大部分、私たちの祈りの結果であるということも事実である。私たちは祈ったとおりに行動する。私たちの正しい祈願は、私たちの行ないを正しい方向に導く効果を生む。伝道に出られ

るようにと(熱心に、真心から、信仰をもって)祈る少年は、自ら進んで伝道に出るための備えをなし、やがて現実にその召しを受ける。常に信仰をもって、神殿で結婚したいと祈る青年は、それにふさわしく行動し、決してこの世の結婚で満足することはない。祈りと行ないは、これほどまでに深く結びついているのである。アミュレクは祈りの律法について詳細に説明した後、次のように結んでいる。

「たとえこれらのことをみな行っても、もしも貧しい者や着る物のない者の願いをことわり、病んでいる者、あるいは悩んでいる者を見舞わず、持物がありながらその幾分を貧しい者に施さないならば、あなたたちの祈りは空しくなってその効果はなく、またあなたたちは神の言葉を否定する偽善者のようになるであろう」(アルマ34:28)

これまで、簡略かつ不完全ではあるが、祈りについて、またそれに伴う偉大な永遠の諸原則の一部について説明してきた。最後に、もうひとつすることが残っている。それは、今まで説明してきた教えが正しいものであり、祈りは永遠の生命へ導く生きた原動力であると証することである。

祈りは、肉欲に従う人にとってはわけのわからない、意味のないものであるかもしれない。しかし神の聖徒たちにとっては、見えざる神と交わる手段なのである。

不信仰で反抗的な人には、祈りは、精神的に不安定な状態から生じた、無意味な信心の行為と映るかもしれない。しかし、ひとたびその実を味わった人々にとっては、祈りは、常に人生の嵐の中における錨となるのである。

祈りは神によって定められた。それは、異教徒たちの空虚な暗唱句とは異なり、祈禱書的美辞麗句とも異なり、不誠実で好色な人間のざれ言とも異なる。祈りは、知識から生まれ、キリストを信じる信仰によって育てられ、真心と真実でささげられるものなのである。

祈りは、この世では平安に至る門を開け、来世では永遠の生命に至る門を開けている。祈りは救いに不可欠である。私たちが祈りを生活の一部にし、私たちの御父に語りかけ、みたまの力によって、み声の答えをいただいはじめて、私たちは罪の状態から抜け出すことができるのである。

神 生命真理へ 誘いたもう

主よ祈りの道 教えたまえ (讃美歌176番)

これまで申し上げてきたことについて、私は証し、御子のみ名によって御父に祈る。すべての末日聖徒と、やがてこの群れに加わる世の人々は皆、祈りと、祈りから生ずる義しい生活とによって、この世においては平安と喜びを得、来たるべき世では永遠にあらゆる良いもので満たされるであろう。誠に然り、アーメン。

☆

☆



小さな お友だちへ



きょうかいがかいふくされて、まもないころ、きょうかいのいは、じゅうぶんの一を、お金ではなくて、はたけのさくもつや、ミルクやタマゴなどで、はらっていました。これは、そのころの、ほんとうのおはなしです。

の一のお金を、かぞえはじめました。アリスは、「わたしも、じゅうぶんの一を、はらいたいな」とおもいました。

お父さんやお母さんが、にぐるまにじゅうぶんの一のさくもつをつんで、かんとくのところへはこんでいくとき、アリスはよ

ある日のことです。アリスがおへやであそんでいると、おねえちゃんのケイトとおともだちのミルドレッドが、カンをもって入ってきました。カンの中には、ふたりがためたお金が入っているのです。ケイトとミルドレッドは、にこにこしながら、じゅうぶん

アリスの じゅうぶんの一

おはなし：アリス・ストラトン



くついて行きました。かんとくのそうこにいくのが、大すきでした。

アリスは、お母さんのところへ行きました。

「ねえ、わたしはいつ、じゅうぶんの一がはらえるようになるの。」

お母さんは、じっとアリスの目を見ました。そしていいました。「アリスちゃん、大きくなったわねえ。もう、らい年は5つになるんですものね。こっちへいらっしゃい。」

お母さんは、にわのほうへ歩いていきました。そして、ニワトリのえさを、ひとつかみじめんにまいて、「コッコッコ…」とよびました。そして、さっとニワトリをつかまえると、それをアリスにだかせて、足をしばりました。そして、こういいました。

「アリスちゃん、トリにえさをやったり、タマゴをあつめたり、よくおてつだいをしたりしてくれたわね。これが、あなたのじゅうぶんの一よ。おねえちゃんたちといっしょに、これをかんとくのところへ、もっていらっしゃい。」

「ほんとう？　ほんとにこれがわたしのじゅうぶんの一？　うれしいなあ」

アリスは、いえの中を走りまわりました。ケイトとミルドレッドは、アリスにだかれ

てもぞもぞしているニワトリを見て、わらいました。

3人は、かんとくのところへ行きました。かんとくは、ドアをあけて3人を中に入れ、大きないすに、すわらせてくれました。

「アリスちゃん、それは何かな。」

「わたしのじゅうぶんの一なの。」　アリスは、目をかがやかせながらいいました。

「ほう、すてきなじゅうぶんの一だね。」　かんとくは、3人にりょうしゅうしょをかいてくださいました。

「なんて、かいてあるんですか。」　アリスはききました。

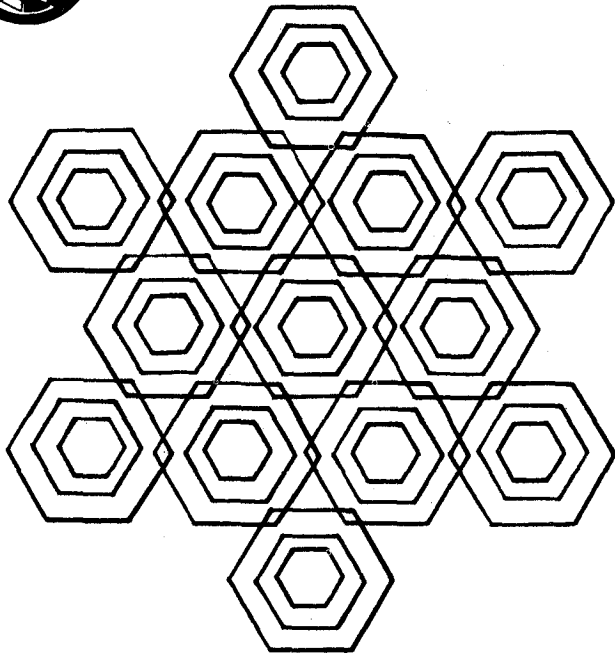
「それはね、『アリス・アイソム、ニワトリ1わ、まつじつせいとイエス・キリストきょうかいにおさめる』ってかいてあるんだよ。」

アリスはうれしくなって、ニワトリにりょうしゅうしょを見せて、いいました。

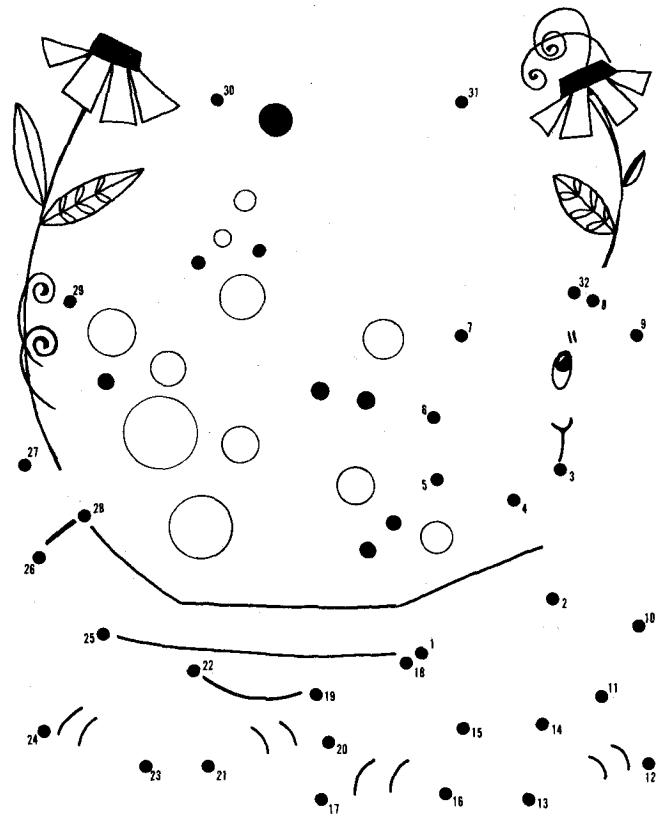
「見てごらんなさい、ニワトリさん。わたしのじゅうぶんの一さん。わたし、あなたを、きょうかいにおさめたのよ。あなたはもう、きょうかいのものなのよ。すてきでしょう。」

かんとくも、ケイトもミルドレッドも、にこにこしていました。アリスは、ほんとうにしあわせでした。

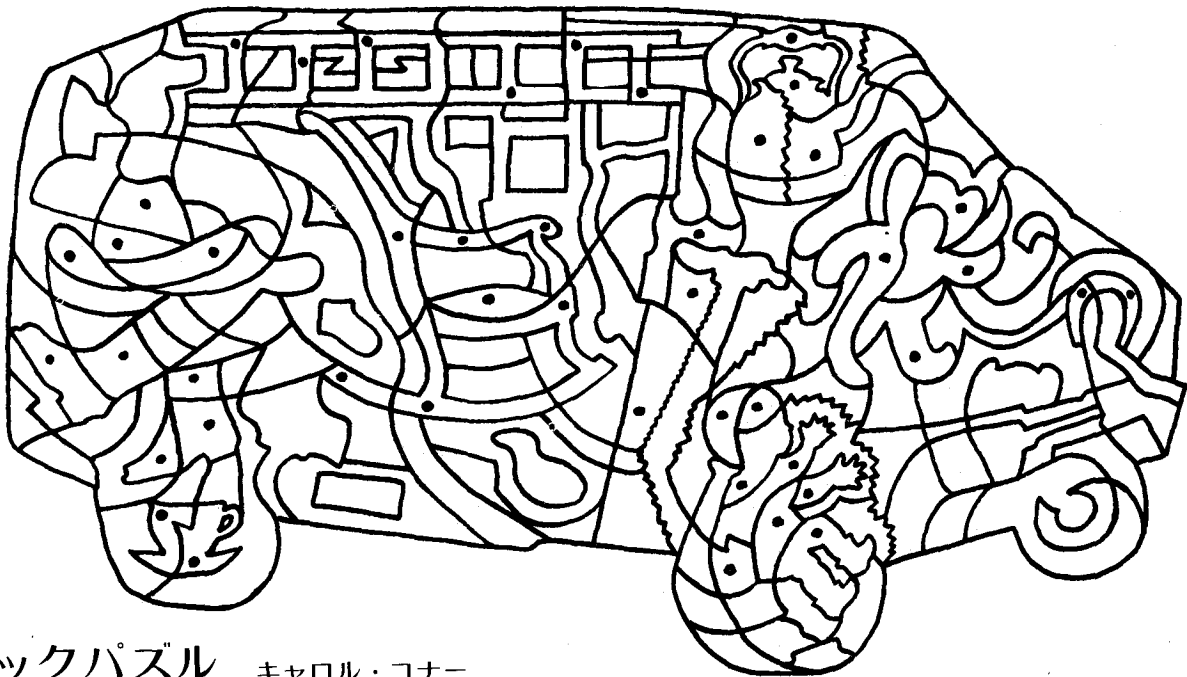
おもちゃばこ



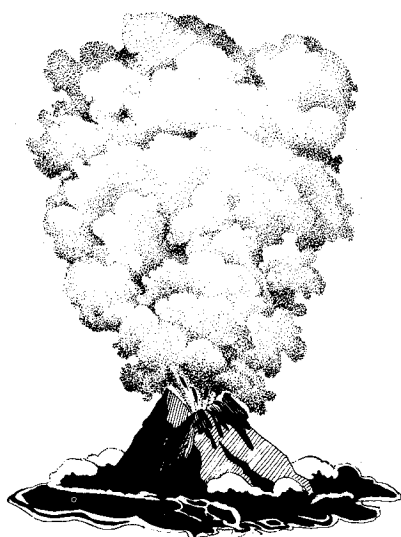
いくつかな？ リチャード・ラタ
6 かくけいが39、ひしがたが24、3 かくけい
が12あります。ぜんぶ見つけられるかな。



てんをむすんでみましょう
ビバリー・ジョンストン



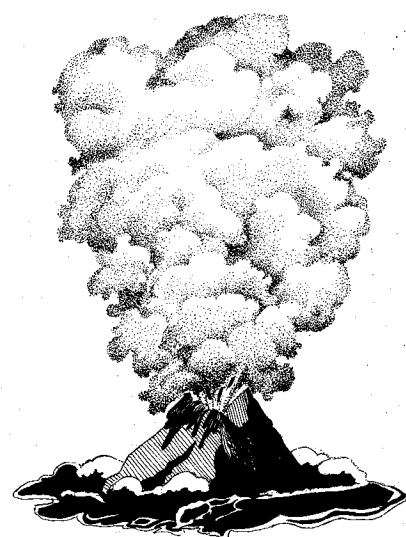
トラックパズル キャロル・コナー
なにがのっているのかな。てんのところを、ぬりつぶしてみましょう。



文とさし絵

ジョアン・アンドレ・ムーア

フィジーの大きな島々は、海で
い火山のふん火によってできました。



目のぼる島

フィジーは、南太平洋にち
らばっている、美しい島です。
この島々は、どのようにして、
できたのでしょうか。それにつ
いては、いろいろないつたえが
ありますが、科学的に考えてみ
ましょう。

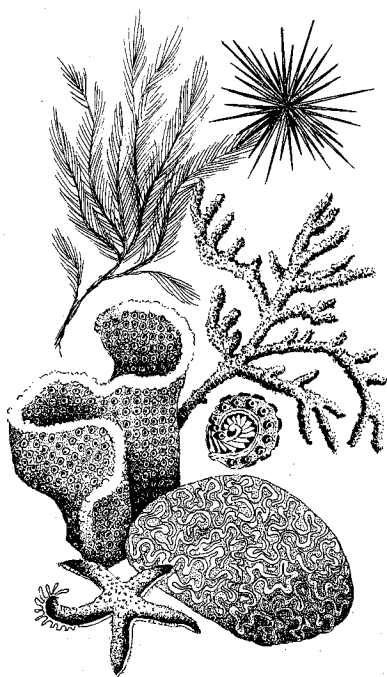
フィジーの島々は、海でい
火山と海の生物でできています。
まず、海でい火山がふん火し
ます。そして、よう岩が火口か
らふき出します。よう岩が海水
にふれて、ひえてかたまり、海
のそこに山ができます。ところ
がふん火は1かいでおわらず、

ひえたよう岩の上にまたよう岩
がふき出し、やがて海面から顔
を出すようになります。そして、
だんだんふん火が少なくなり、
かたい、ごつごつした岩はだの
島ができあがるのです。

水の中には、サンゴ虫がおよ
いでいます。サンゴ虫は、海水
の中のカルシウムや炭素をすっ
て、自分の体のまわりに、から
をつくっていきます。サンゴ虫
が死ぬと、カラだけがのこりま
す。こうしてつみかさなった、
サンゴ虫などの海の動物のしが
いが、やがて海面に出て、島の

まわりに、かんじょうサンゴし
ようとよばれる、サンゴしょう
をきずくのです。

長い時間をかけて、島は少し
ずつかわっていきます。日にて
らされ、雨にたたかれ、波にあ
られ、風にふきさらされます。
そして、ほんの少しずつ、かた
い岩のひょう面が、すなと土に
かわっていくのです。時おり、
アジアやマレー半島からふいて
くる風が、バクテリアやちりを
はこんで来ます。このバクテリ
アが島の土をこやします。この
島のさいしょの住人は、やかま



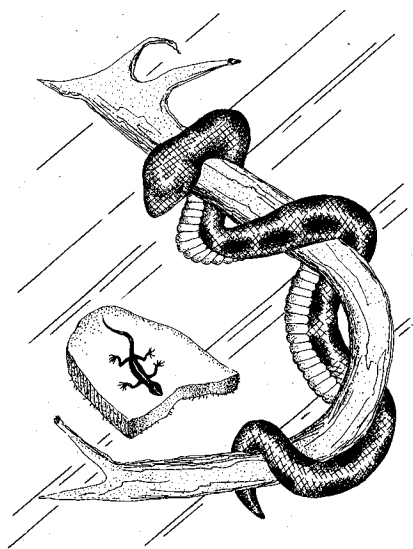
フィジーの小さな島々や、そのまわりのサンゴしょうは、海の生物のはたらきによってできました。

う、タコの木やセイタカシギの木のたねもそうです。

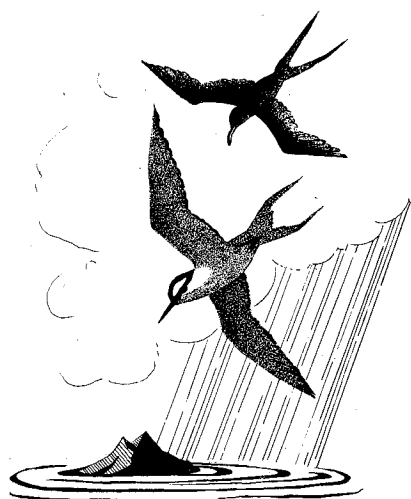
木々のこい緑には、赤やむらさきや、ピンクや、オレンジの花がよくにあいます。フランジパニー、オレアンダー、ハイビスカス、ランなど、ねったいの花々がさきほこっています。フィジーの島々は、何でもすまわせてくれるようです。

そうです。こん虫たちもやって来ました。クモ、チョウ、ハエなどが、風にのってやって来たのです。

は虫類もやって来ました。青いしっぽのトカゲが木のぼりをしています。かわのようなせなかの大きなカメも、のそのそは



ヘビとトカゲは木にまきついて、波にゆられてわたってきました。



この島をさいしょに見つけたのは
海の鳥たちでしょう。あじさしとぐ
んかん鳥が島をながめています。

い上っがって来ました。大きなへびも木にまきついて、波にゆられて海をわたって来ました。フィジーには、太平洋の島々にいるへびは、大ていいます。サンゴしょうには、花びらのような、小さい魚がいっぱいおよいでいます。そうそう、クジラもむれになっておよいでいるんですよ。

でも、ほにゅう類だけは、れい外です。ほにゅう類は、海をこえて来られないので、あまりいません。そうでした。コウモリがいます。コウモリは空をとんでやって来たのです。

人間のことをわすれていました。さいしょにフィジーにや

って来た人間は、はだの黒いメラネシア人でした。メラネシア人は石器でカヌーをつくり、ヤマモ、タロイモ、バナナ、サトウキビなどをつんで、自分たちがすむ島をさがしていたのです。カヌーには、ブタや犬やネズミものっていました。

しばらくたって、ヨーロッパ人がフィジーを見つけました。今から、200年くらい前のことです。ヨーロッパ人にとって、フィジーは、美しいにわのようでした。みどりの森におおわれた高い山、ながれの早い川、

音をたててながれおちるたき、青いぬま、おんせん、……目を見はるばかりの美しさでした。

それから、インド人、中国人、ハワイ人などがやって来ました。それぞれの国の動物や植物も来ました。たとえば、マングース、九かん鳥、スイカ、キャベツ、ヒキガエルなどです。

今日フィジーは、「夜明けの島」「日がのぼる島」などとよばれています。ちょうど、日づけへんこう線が通っているからです。

フィジーに行ってみてごらんください。心のあたたかい、よい気な人々に、たくさん出会いますよ。



えいえんの友

ダビデがゴリアテをころすのを見て、サウル王は、ダビデがきにいり、きゅうでんへつれてかえりました。ダビデは王のむすこヨナタンと、ともだちになりました。ヨナタンはダビデをあいし、ダビデはヨナタンをあいしました。そして、ふたりは、どんなことがあっても、ともだちでいようとやくそくしました。

ダビデは、いくさにいくと、いつもてがらをたてたので、やがてたいちょうになりました。ある日のこと、サウル王やヨナタンやダビデがいくさからかえってくると、イスラエルのひとびとが、手に手にことやつづみをもって、

「サウルは千人、ころし

ダビデは1万人ころした」

とうたっていました。

それをきいて、サウル王はおこりました。じぶんよりもダビデのほうが、ほめそやされるのが、おもしろくなかったのです。よく日、サウル王はまるで気がくるったように、ダビデを二どころそうとしました。しかし、

ダビデは、みをかわしてにげました。

そこでサウル王は、ダビデをいくさに出し、せんじょうでころしてしまおうと、かんがえました。それをきいて、ヨナタンはとてもかなしくなり、王にいました。

「ダビデがあなたに、なにかわるいことをしたのですか。それどころか、いのちをかけてイスラエル人のために、たたかったではありませんか」

サウル王は、それをきいてころをやわらげ、こうやくそくしました。「主は生きておられる。わたしは、けっしてダビデを

ころさない」

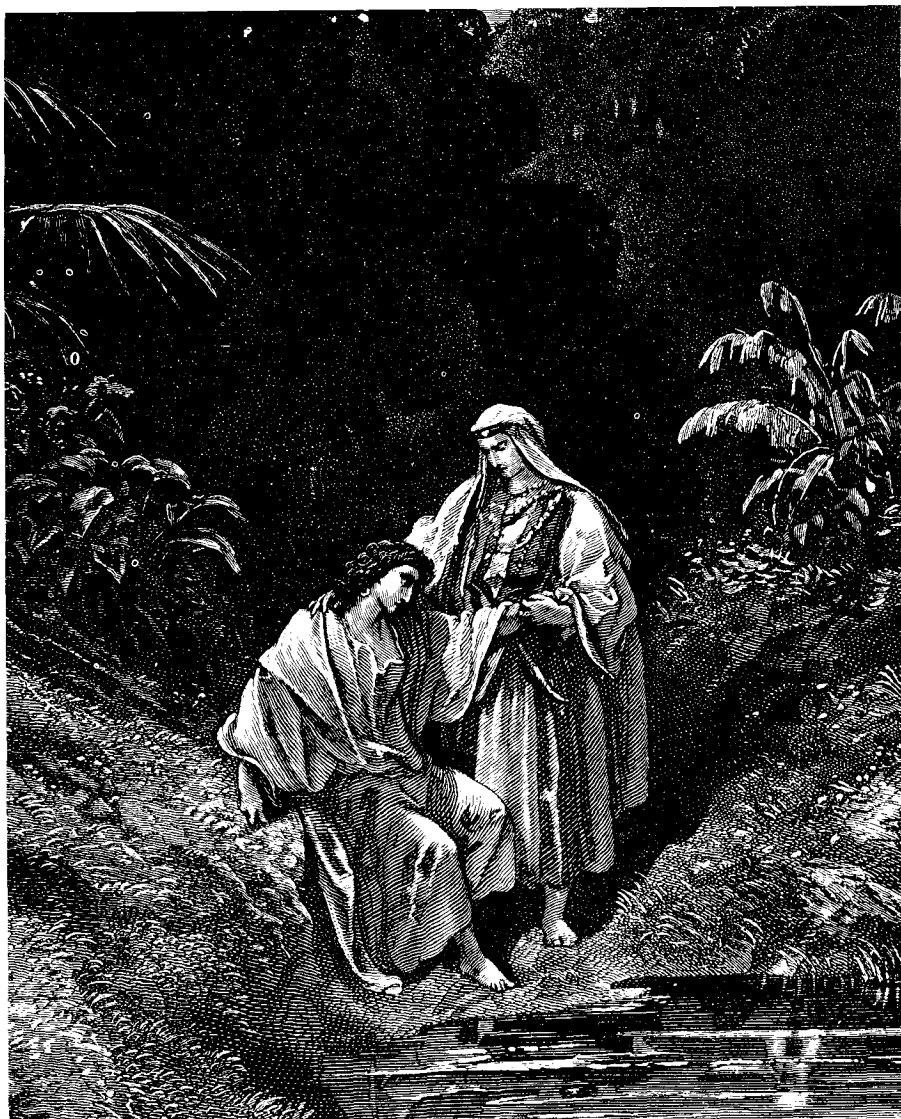
ところが、またいくさがおこって、ダビデがてがらをたてました。サウル王は、またしてもダビデをいかり、ころそうとしました。ダビデは、そのばん、サウルのきゅうでんからにげだし、ヨナタンにあっていました。

「あなたの父サウル王は、わたしをころそうとしました」

ヨナタンには、ダビデのことばが、しんじられませんでした。ヨナタンは、いました。

「父のころをたしかめてきましょう。王のころがわかったら、かりに行くふりをして、





するとどうでしょう。サウル王はおこって、ヨナタンまでもころそうとしたではありませんか。

ヨナタンは、けらいといっしょに、のはらに出て行き、かりをするふりをして、やをいました。そして、いいました。

「やはあっちだ。」

けらいを町へかえらせてしまい、まわりにだれもいなくなると、ふたりはかけより、だきあってなきました。ダビデがたずかるためには、ふたりはわかれなければなりませんでした。ヨナタンはダビデにいいました。

「きをつけて行ってください。さようなら。でも、わたしたちは、いつまでもともだちだよ。わたしたちのあいだには、主がおられるのだから」

はなればなれになっても、ダビデとヨナタンのところは、かくむすびついていた。



あなたにしらせにきます。わたしがやをいて、『やはこっちだ』とさけんだら、父はあなたをころさない、というしるしです。そのはんたいに『やはあっちだ』とさけんだら、どうぞ、にげてください。」

ヨナタンはきゅうでんにかえり、サウル王とかたりました。

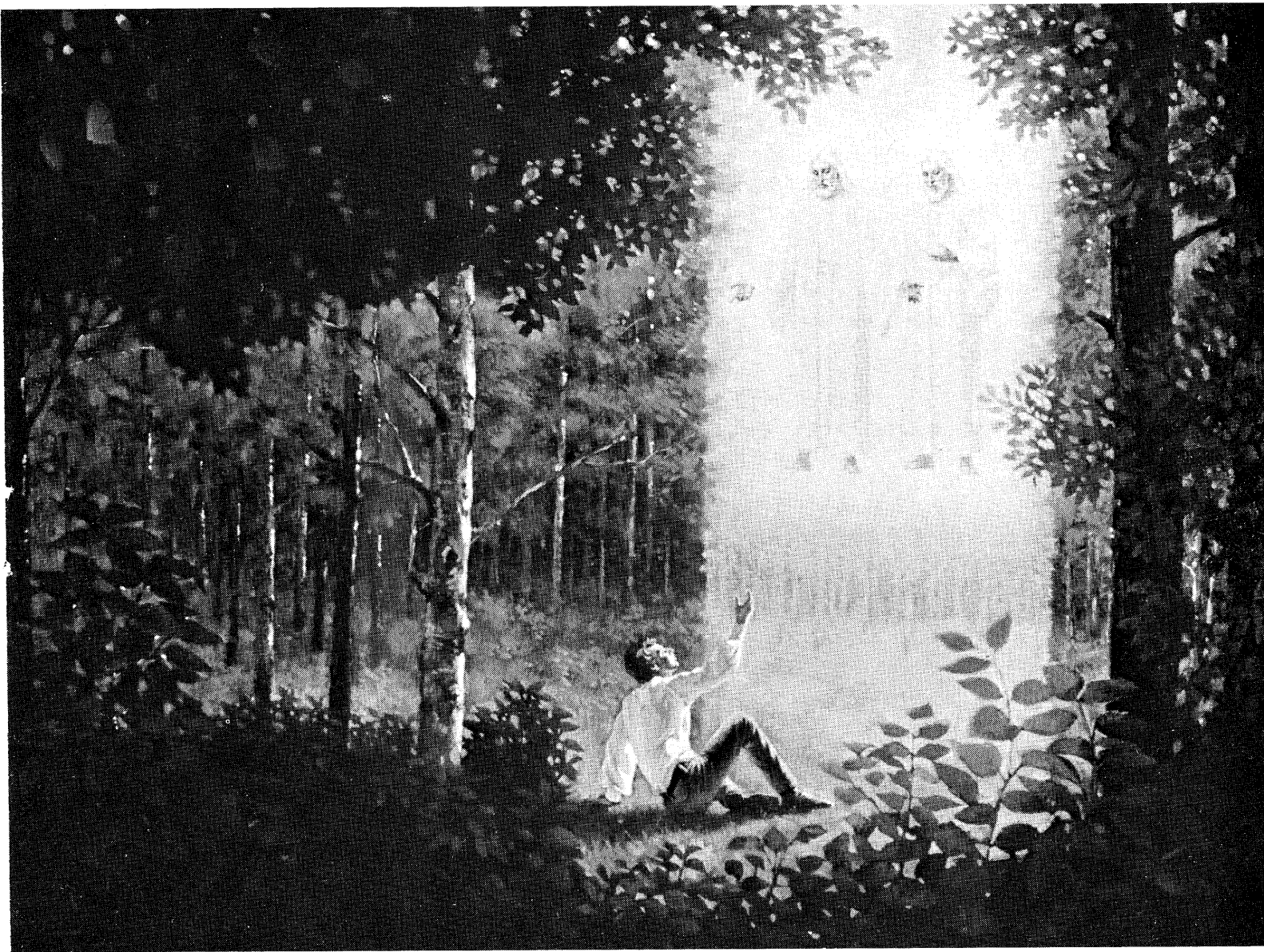
祈りと予言者ジョセフ

トルーマン・G・マドセン

1972-73年にカリフォルニアで
行なわれた「宗教講座」の話より

私は大勢の人々から次のように尋ねられる。「予言者ジョセフ・スミスは、14歳という年齢で、どうして森へ行き、それまで口に出して祈ったことがなかったというのに（つまり、以前、心の中では祈ったことがあるということである）、最初の祈りで、あのように偉大で驚くべき祝福を受けることができたのですか。ジョセフは他の人々よりはるかに大きな信仰を持ち、はるかにふさわしかったということですか。」

これに対するひとつの解答は、予言者ジョセフ・スミスが受けたおとずれが、彼ひとりの祈りにだけ答えたものではなかったということである。文字通り何百万という人々の、また恐らくは幕のかなたへ去った人々をも含めて、何世代にもわたって福音の回復を願い求めていた人々の祈りに対する答えだったのである。事実これは、何億という人々がささげてきた「御国がきますように」（マタイ6：10）という祈りの言葉の成就であった。これは、極めて大切な考え方である。私たちはひとりで祈っているのではない。私たちは、近代の大きな流れの一部として祈っているの



あり、その流れの中で、力を与えられているのである。私たちが器になりたいと心から望むならば、あるいは、いささかでもその気持があれば、類まれな特権が私たちには与えられる。その中には、聖霊のもたらす権威や賜や祝福、それに、神権という無上の祝福も含まれる。

ジョセフ・スミスの祈りの生涯の中で特筆すべきことは、その親密さである。「彼は兄弟たちに、幼な児がへりくだって親のもとへ行き、その心の望みをうち明ける信仰、そのような信仰こそがあなたの方にとって必要である」と語った。(Life of Heber C. Kimball「ヒーバー・C・キンボールの生涯」 pp. 69, 70) 神について語るとき、また神に語りかけるとき、「はるか遠く」の存在として、また全く異なった、超越的な存在として語るのが、神に対して敬意を表わすことであると考えている人が大勢いる。そのような人々の描く神の姿は、姿を持っていたとしても、何か極めて高度な原則のようなものであるか、あるいは「純粋な知性」のようなものであるか、あるいは識別できない光のようなものであるかそのいずれかである。だが、ジョセフにとって宗教の第一原則は(それはまた、祈りの第一原則でもあるが)神が父であることを確実に知ることである。そして、神と私たちとの間に個人的な結び付きがあるということを知るだけでなく、神がひとりの御方であり、また最も高い最も完全な御方であるということを知ることである。また、ちょうどモーセが「人がその友と語るように」(出エジプト33:11)語ったと同様、私たちも神と語ることができるということを知ることである。次に挙げる一文は、ダニエル・テイラーの記録である。予言者ジョセフが、そのような親密さを示した好例である。

「私は男女を問わず、人々のささげる祈りをたびたび耳にしてきた。特に男性教育の面でも知性の面でも全く無学な者から、知識に富み、弁舌に長じた者に至るまで、いろいろな人々の祈りを耳にしてきた。しかし、あたかも造り主がそこにおられるかのごとくに、人が造り主に向かって祈るのを耳にしたのは、ジョセフの祈りが初めてである。まるで、心やさしい父親が、忠純な息子の悲しみに耳を傾けて下さっているかのようにであった。ジョセフは当時、無学であった。しかしその祈りの大部分は、ジョセフを邪道に入って罪に陥っていると責めた人々のためにささげられた祈りであった。ジョセフは、主よ、彼らを救したまえ、そして彼らも正しく物事を見ることができるようその眼を開かせたまえ、と祈った。その祈りは、私のへりくだった心で申し上げれば、天からその知恵と雄弁さとを授かったような感じのものであった。見えすいた言葉で飾ることもなければ、熱狂して声を張り上げることもなかった。工度、人が目の前にいる友に話しかけるように、淡々とした会話体であった。私には、あたかも幕が取り除かれて、私が出会った主の僕の中でも最も謙遜な僕ジョセフのすぐ前に主が立っておられるような感じがした。」(『ダニエル・テイラーの回想録』Juvenile Instructor「ジュブニル・インストラクター」27:127)

ここで予言者ジョセフの祈りについて、彼の経験が私たち自身の経験とどのような点で一致しているか、また、私たちの経験をどのように強めてくれるか、という観点から、基本的な疑問点を少し提起してみたいと思う。

ジョセフの祈りは短かったのだろうか、長かったのだろうか。教会への改宗者であったメアリー・エリザベス・ロリンズ・ライトナーは、当時まだ14歳であったが、母親と共に予言者の家へ行き、素晴らしい説教を聞いたときの様子を記録している。そのとき、予言者の顔は美しく輝き、予言者は、キリストが身近におられると証した。それからジョセフは、その場にいた全員に、ひざまずくように言い、祈り始めた。ライトナーは次のように記録している。「私は、それ以来、あのような祈りは聞いたことがない。私は彼が主に話しかけているように感じた。そして、力が私たち全員の上に留まった。その祈りは非常に長かったため、そこにいた人々の中には、立ち上がって休息をとり、それからまたひざまずいた人もいた。」(Diary of Elizabeth R. Lightner.「エリザベス・R・ライトナーの日記」、BYU 特別収蔵文庫より、p. 3)

一方、カートランドの家に行ったときのことである。食卓には、ほんの少しの食物しかなかった。彼は立ち上がってこう言った。「主よ、このとうもろこしパンに感謝します。私たちにもっとよいものを送って下さるようお願いします。アーメン」間もなく戸口でノックの音が聞こえた。そこには、ハムと小麦粉を持った男の人が立っていた。予言者は喜んだ。「わかったかい、エマ。私は、主が祈りに答えて下さることを知っていたんだ。」(Juvenile Instructor「ジュブニル・インストラクター」17:172)この場合は、簡潔な祈りであって、決して長いものではなかった。

結局、長い祈りもあれば短い祈りもある、ということである。

予言者ジョセフは、主に「父よ」と呼びかけたであろうか、それとも他に何か特別な呼びかけ方を使ったであろうか。ほとんどの場合、彼は、「私たちの父よ」あるいは簡単に「父よ」または「主よ」と呼びかけた。そして、その呼びかけの言葉を形容詞や麗々しい言葉で飾ろうとはしなかった。そのような形容詞がふさわしいこともあるかもしれないが、彼にとっては、簡単な「父よ」で十分であった。そしてこの点でも、また他の数多くの点でも、彼の祈りは、キリスト御自身の祈りの形式とよく似ていた。

彼は祈にふれて、次のように言った。「隣家へ行って、『製粉所まで行くのに馬を借りたいんですが』と言うのと同じように、単純明快に、自分の欲しいものを求めなさい。」(Juvenile Instructor「ジュブニル・インストラクター」27:151, 152)つまり、直接的に、心やすく、自然に祈るということである。

けれども、神聖な場面で予言者が公式に祈ったときには、その祈りは一種の儀式となった。そのような祈りのひとつが、カートランド神殿の献堂式でささげられた祈りである。この祈りは、教義と聖約第109章に記録されているが、これは以後の献堂式の祈りの原型となった。ジョセフはここで主から祈りとしてささげるべき言葉を与えられている。そして、その言葉を主にささげたのである。循環しているだけだという印象を持つ人もあろう。しかし、ここで予言者が教えようとしていることは、(J・ルーベン・クラーク・ジュニア副管長が述べたように)私たちが絶えず祈り求めなければならないことのひとつは、私たちが絶えず祈り求めなければならないことは何かということを知ること

である、という教えである。(Conference Report「大会報告」1960年10月、p. 90参照)

祈りの過程のうち、少なくとも半分は、私たちの心をもっと柔軟で受け入れやすいものとするための過程である。そうすることにより、私たちは辛抱強く耳を傾けることができるようになるし、またどのように、いつ、何について祈ればよいかを知るようになるのである。近代の約束の中に、福音を受け入れる者には「すべてのものが与えられ」という約束がある。主のみ言葉では「すべてのものの所有者」となっている。「すべてのもの」とは、「御父の御旨によりてその子イエス・キリストを通じて遣わさるる生命、光明、『みたま』、能力」であると定義されている。そしてさらに、「イエスの名によりて何事にまれ欲するところを願え、さらば皆与えられん。されど、汝らこれを知れ。すなわち、汝らの願うところはすべて与えられん。」(教義と聖約50：27-30参照)

しかし、予言者ジョセフは、与えられそうもないことを求めて祈ったり、導かれるはずのない導きを求めて祈ったりしたことはなかったであろうか。やはり、あった。私たちと同様、彼も時には、空しい葛藤をしている。例えば彼は、キリストの再臨の時を知りたいと切に願った。彼は、「熱心に」祈ったと言っている。しかし、これに対する主の答えは、本当の答えではなかった。ただ、「あなたには告げない」と言う意味の答えであった。すなわち「わが子ジョセフよ。汝もし八十五才まで生き永らえなば人の子の御顔を拝すべし。さればこれを以て満足すべし。このことに就きてもはやわれを煩わしむるなかれ。」(教義と聖約130：15) そのため、彼は、次のような結論を記録するにとどめた。「人の子の来たりたもう時は、その時よりも速なることあらざるべし、とわれ信ず。」(教義と聖約130：17)

主は明らかに、ジョセフにも、私たちにも、正確な時を知らせることを望まなかった。主の栄えある再臨が明日にでもあるかのごとく私たちが生活を続けるよう、主は望んでおられる。これは、私たちが霊的な意味でどのように備えをなすべきかを告げている。主は、再三再四、「わたしはすぐに来る」(黙示22：20参照)と言っておられる。しかし一方、ウィルフォード・ウッドラフが指摘したように、私たちが「桜の木を植える」ことを主は望んでおられる。これはつまり、杞憂家のように不確かな知識に動揺することなく、長期の霊的なビジョンをもって生活するようということである。杞憂家はこのように言う。「世界は5年もしないうちに、ばらばらに分裂してしまうのだ。だから学校へ行く計画を立てても、何になる」全くもって浅薄な、現実逃避主義者である。

あるとき予言者は、聖徒たちがミズーリ州でなぜそれほどまでに苦しまなければならないのか知りたいと思い、祈った。そのことに関連した書簡が残っているが、その中には、次のような嘆きが書かれており、私たちの胸を打つ。「主は私に答えて下さらない。主は私に答えて下さらない。」そして、それ以前にも、彼は、主が決して与えないと言われたものを乞い求めたことがあった。

マーテン・ハリスの事件を覚えていることだろう。予言者は3度にわたって原稿をマーテンに貸す許可を求めて祈

った。しかし、3度とも許可されなかった。そこで予言者は、事実上、主に抗議することになった。「でも、主よ、わかって下さらないのですか。マーテンは自分の畑を抵当に入れてくれました。彼の妻がせがんでいるのです。どんな害があるとおっしゃるのですか。」ようやくのことで許可は下りた。この後のことは、スミス家の母親の記録に詳しく出ている。数日後、マーテンはスミス家へやって来たが、家の中へ入ろうとせず、行ったり来たりしていた。予言者は窓越しにマーテンを見つけると、最悪の事態を憂慮して、部屋から飛び出して行った。「マーテン、まさか、なくしたんでは……」マーテンはうなずいた。それから2週間というものの、予言者の気持は慰められることがなかった。家族もだれひとり、彼を悲しみから救うことはできなかった。彼が極めて大きな罪を犯したと感じていたからである。その苦しみから救われて、彼の心に喜びが戻って来たのは、次のような啓示が与えられたときであった。「悔い改めよ。然らば汝は……再び神の業に召さるるなり。」(教義と聖約3：10) 言語に絶する喜びであった。ジョセフは、その日受けた啓示について、「その戒めから私は勇気を得た」と記録している。そして次のように結んでいる。これこそ、彼の経験の総決算であったように私には思えるのである。「以来、私は主から命じられたときには、その通りに行なうことにした。」(The History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」2：270) ジョセフは、こうしてひとつのことを学んだ。しかも彼は、私たちと同じように学んだのである。つらい経験であった。

予言者ジョセフは、家族の祈りを実行していただろうか。予言者やその家族に一面識もない、ある兄弟が訪問したときの出来事が記録されている。彼はドアをノックしようとしたが、家の中から歌声が聞こえてきたので、思いとどまった。家族と訪問客を交えた家族の礼拝行事のような会で、エマ姉妹が音楽の指揮をしていた。その後、予言者が祈った。その兄弟は、予言者の祈りを息を殺して聞いていた。彼はそのときの経験を「天昇の幸福の味わい」と表現している。

記録によれば、ジョセフは1日に3回、家族と共に祈っていた。また彼はあるとき、ダニエル書を引用して話をした際、私たちは「主の宮居に向かって1日に3回祈る……人々について詳しく知る」べきであると言ったという。(History of the Church「教会歴史」3：391)ダニエルもそうしたひとりであった。

神殿に向かうというのは、どのような深い意味があるのだろうか。明らかにこれは主が私たちに与えた約束を思い起こし、また私たちが主と交わした約束を思い起こすための神聖な方法である。そのため、ウィルフォード・ウッドラフ大管長は、ソルトレーク神殿を献堂した際、特別な祈りをささげた。それは、人々が誘惑や問題に襲われたとき、神殿の約束を思い出すように、また神殿に向かうように、そして、主がその祈りを嘉納して下さるよにという祈りであった。

ジョセフは、苦難や迫害を受けたときも祈ったが、また深い感謝の祈りもささげている。こういう点が彼の眼識の深いところである。彼は聖徒たちに、徳高いことや聖いこ

とを实践し、また「如何なる祝福を受くとも、『みたま』によりてこれを神に感謝せざるべからず」(教義と聖約46:32)と教えた。私たちは、祈りのすべての時間を、ただ感謝と讃美のためだけに費やしたことが何度位あるだろうか。彼はまた聖徒たちに、すべてのものに感謝するようになれば、「栄光を与えられん」(教義と聖約78:19)と教えた。ジョセフ自身、主や同胞から与えられたどんなささいな恵みにも感謝をささげることのできる、生涯の傑出した才能を何度か披露している。私は、彼の日記から、兄弟たちのための祈りの箇所を読むたびに涙を流す。「父よ、何々兄弟を祝福して下さい。私を舟に乗せて川をこぎ渡ってくれたために、彼の手には水疱ができてます。』どんなささいな恵みであっても、燃えるような暖かさと感謝の心とを呼び起こしたのである。

教義と聖約の中で、8ヵ所にわたって、主は予言者を通じて「絶えず(常に)祈るべし」と告げておられる。どうしたらそれが可能であろうか。もし「絶えず祈るべし」という意味が、声に出して、という意味であったら、私たちはひとりとしてそれができない。しかし、「絶えず祈るべし」という中に、口に出さない、また心の中での祈りのようなものも含まれるならば、私たちは一歩近づくことができる。さらにそれが、私たちが何をしようとも、常に祈りの精神でいるということ、つまり、祈りに満ちた生活をするということであれば、だれでも可能になってくる。その精神で、ジョセフ・スミスの伝道中の日記を眺めると、それは絶えざる祈りであったと言える。「主よ、私たちの証を、彼らの心に結び固めたまえ。」「主よ、私の家族に慰めを与えたまえ。」そして、彼の生涯の最後の言葉も、やはり祈りであった。いわば、祈りの極地であった。「おお主なるわが神よ」

しかし、言葉はどの程度重要なのであろうか。予言者ジョセフは、新約聖書の注釈をつけていた際、この点に関する重大な箇所に変更を加えた。それはローマ人への手紙の中で、パウロがみたまはいかにして私たちの祈りを助けることができるかについて説明している箇所である。「御霊みずから、言葉にあらわせない切なるうめきをしているわたしたちのためにとりなして下さるからである。」(欽定訳ローマ8:26)予言者の版では、こうである。「御霊は表面に出ない懸命な努力をしているわたしたちのためにとりなして下さるからである。」(*Teaching of the Prophet Joseph Smith*「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.278)私たちが、みたまの識別の力に十分な信頼を寄せていれば、いたずらに形式にこだわることもなく、むしろ、私たちの心の奥深くにあるもの、つまり、言葉や音声では言い表わすことのできないものを表現するのにもっと心を砕くようになる。そうすると、みたまが私たちの懸命な努力をくみ取って、天父に伝えて下さるのである。懸命な努力と切なるうめきとは異なる。私たちは、失意と落胆のうちにうめくことはできるが、それは、私たちの失望の状態をさらに悪くするだけである。しかし、懸命な努力の方はもっと積極的な意味合いを持っている。

私たちは、たとえ言い表わすことのできないものであっても、懸命な努力をすることはできる。また、私たちが、静かに、また敬虔な気持で、その努力を御父と御子に向け

れば、みたまがそれを完全に伝えて下さることを知ることのできるのである。

それに対してみたまは、他の力では決してもたらされないような、主の答えを伝えることができるのである。私たちが、そういうみたまに信頼を寄せれば、大きな自信と大きな自由もわいてくるのである。

声に出して祈ると、私たちの心はその言葉通りの道をたどるという点で助けになる。しかし時には、口に出さない祈りにも、あるいはまた、慎重に考えていてどうとも迷っていることにも、優れた点はある。心の思いを、それが感じるままの方向に進めさせるのがよいであろう。

霊的な意味で、どのようにしたら集中できるであろうか。予言者が神権定員会に与えた指示を見ると、この問題や、力強い祈りというものの様々な要素に関して、注目すべき形式が記録されているのがわかる。次は、彼自身の手になる正確な記録である。「私はしばらくの間、これらの定員会(大祭司、七十人、長老、監督、および十二使徒)の各会員と共に働いた。彼らが、主の示して下さいった秩序に従うよう導くためである。それは次のようなものであった。」(*教会歴史*2:391)これは、カートランド神殿における特殊な性質の定員会活動であった。「神の前にささげる厳粛な祈りの第一段階では、いかなる会話も混乱もない。」明らかにこれは、厳粛な、無言の、そして恐らくはささやきの祈りである。しかし、だれひとりとして人に聞こえるような声で祈る人も、ましてや大声で祈る人もなかった。

そして、最後の固めの祈りは、リグドン副管長がささげた。言い換えれば、この時点で、ひとりの人が全会衆に代わり、声に出して祈るのである。その後「全定員会は、アーメン、アーメン、アーメンの声と共に、一致して、神と子羊に、荘厳なホザナの叫びをあげたのであった。」この「ホザナの叫び」は、通例、神殿の献堂式の時に行なわれるものであるが、このように、神聖で、個人的なこととも関係していたのである。3回にわたって「ホザナ」と呼び、3回にわたって「アーメン」と言うことになっていた。「その後、皆すわり、神に沈黙の祈りをささげて、その心を高める。そして、もし啓示や示現を受けた者がいれば、すべての人が啓発され、共に喜べるよう、立ち上がってそれを発表するのである。」

この教えは、啓示に従ったものである。しかしながら、私たち自身が個人的な、あるいはひそかな祈りをささげるときにも、この精神を応用することができるようになる。すなわち、まず第一に、精神の集中を図る。騒がず、沈黙したままである。次に、声に出して、結び固めの簡潔な祈りをささげる。次に心の底から感謝と要望の声をあげ、敬意を表わす。そして最後に、私たちの心を開き、感じやすくし、さらにみたまによりもたらされるものを言い表わし、また個人的な生活では、それを心に留めて主に仕えるのである。

この勧告が実行に移された場合、どんなことが起きただろうか。ひとつの例がある。予言者の日記には次のように書かれている。

「七十人定員会は、聖きみたまがあふれんばかりに注がれるのを味わった。多くの者は立ち上がって、自分は聖霊に満たされたと証した。まるで、骨の髄の中で火が燃えて

いるようであったため、彼らは黙していることができず、神にホザナの叫びをあげずにはいられなかった。』(「教会歴史」2:392)

そして、彼自身について、次のように書いている。

「これらの定員会が退出した後、私はみたまに満たされたまま家路についた。夜眠らずに、静かに過ごしている間中、私の心は神と子羊にホザナを叫んでいた。また、私が眠りについて目を閉じると、主の示現が快く私を包み、主の栄光が私を取り巻いた。』(「教会歴史」2:387)

この出来事から、多くのことを学ぶことができる。

しかし、私たちがふさわしくないと感じたときには、どうしたらよいのだろうか。予言者自身、エマに宛てた手紙の中で次のように書いている。「私は、自分の生涯のこれまでの出来事を皆振り返ってみたが、私の愚かしさのために、ひとり嘆き、また悲しみの涙を流した。』詳しく研究すればわかるが、予言者という予言者は皆、こうした悲しみに沈んだ夜のことを知っているし、同じような苦悩を味わっている。私たちの言い伝えにある偉大な人々も皆同じであった。例えば、ニーファイを例に挙げてみよう。彼はその第一書の中では、極めて純粋な信仰をもって諸々の事柄を記録している。そのため、そのような恐れを抱いたり、信仰がぐらついたりしたものかどうかいぶかしく思うかもしれない。しかし事実、彼はその賛歌の中で次のように言っている。「私は嘆かざるを得ない。私が喜ぼうとすると、自分の罪のために、私の心はくじけてしまう。』(IIニーファイ4:17-19参照)そしてさらに、彼は全身の力を振りしぼって次のように祈っている。「おお主よ、われを包みたまえ、われを助けたまえ。』(IIニーファイ4:33参照)そのような霊的な浮き沈みは、だれにでもあるものである。しかしもしも私たちが皆完全になるまで待っていたら、教会では一体どんな仕事ができるというのだろうか。

予言者が、壮大な示現の中で、異国の地にいる十二使徒のうち少なくとも9人の使徒を見たことを覚えていることと思う。(彼はその異国の地がイギリスだとは言っていないが、彼らは結果的にはイギリスへ渡った。)彼は、使徒たちが円くなって集まっている光景を見た。彼らは履き靴もなく、むち打たれ、衣服も裂け、失意のどん底にあった。彼らの上空に、主イエス・キリストが立っておられた。そして予言者には、主がそのみ姿を彼らに現わし、手を差し伸べて引き上げようとしておられるのが、手に取るようにわかった。しかし、使徒たちには主が見えなかった。救い主は彼らを見て泣かれた。私たちは、この示現の話をつたりの兄弟から伝え聞いている。ジョセフがこの示現について詳しく話をするとき、涙なしでは語ることはできなかった、と言われている。なぜだろうか。なぜ彼はそれほどまでに心を動かされるのであろうか。それは、キリストが御父の家族が皆、主のみもとに臆することなく来れるよう、喜んで地上に降臨して下さったからである。罪を犯したとき私たちの身の上に何が起こるか、主はよく御存知である。また、主が私たちの思いも関心も皆よく御存知であることも知っている。人生における最大の悲劇は、主がその心を愛情で満たすために代価として肉体にあのような恐ろしい苦痛を受け、そして私たちを助ける備えをして喜んで手を差し伸べて下さっているにもかかわらず、私たちの方で主

を受け入れる余地をなくして主を拒んでしまうことである。私たちは顔を上げて差し伸べられている手にすがらることをせず、ただ下ばかり見ているのである。

私たちの生活の中でも、ある種の特権を受けるに多少なりともふさわしくなりたいと感じさせるものがあるかもしれない。しかし、私たちが決して資格を失わないものがひとつある。それが祈りである。私はこれについて証する。予言者ジョセフ・スミスは、それを教えただけでなく、実践した。私たちは精神状態のいかににかかわらず、主のみもとへ行くことができるし、また行かなければならない。主が私たちに門を閉ざされることは決してない。主は、私たちが最も必要なときに御自身を呼び求めることを心から願っておられる。そして、最も必要なときというのが、私たちが最もふさわしくないと感じているときであることが、度々である。

最後に証を述べたいと思う。私たちには、近代の予言者ジョセフ・スミスの生命力あふれる、生き生きとした祈りの模範がある。彼の祈りこそ、密接な触れ合いであり、人生を変える祈りである。しかしそれに加えて、予言者は、祈りとは主観的なものではないと絶えず説明している。それは、単なる自己催眠ではない。これから進むべき計画と道である。私たちは、その祈りによって実際に幕を裂き、そしてキリストを通じて生ける神の生けるみ手を受け入れるのである。この証をイエス・キリストのみ名により申し上げる。アーメン。



日々の恵み

どうしてキャシーは 私と違うのでしょうか

ジェーン・P・コビー

私が11歳になったとき、父母は私に美しい古典文学の本を1冊プレゼントしてくれました。私はその1ページ1ページをいとおむように読み、最後のページを繰るときには涙が浮かんだものでした。その本を自分の娘にやりたいと思って長い間大切にしまっておいたのですが、娘のキャシーがちょうど11歳になったのでそれを贈りました。娘はプレゼントをととても喜び、感激したのですが、勇んで初めの2章は読み通したものの、それからあとは棚にしまい込んだまま手つかずの状態でした。私はとてもがっかりしました。

私はどういうわけか、娘は自分と同じふうだ、自分が少女の頃に読んだと同じ本を好み、自分と似たような気性で同じようなものが好きだと、いつもひとり合点していたのです。それから月日がたって4人の娘を持った今、ひとりとして私に似ている子はいません。今はそのことを喜んでいますが、昔はそうではありませんでした。

「キャシーはチャミングではしゃぎ屋さん、よく笑うちょっぴりいたずらっ子」と先生はおっしゃいましたし、「みんなを楽しくさせる」と友だちは言い、「人生を楽しんで、どこにもユーモアを見つける感じやすい子」と父親は言いました。

ところがある日私は夫にこう言いました。「好奇心が強く何でも手をつけないと気がすまないし、遊ぶことにかけてはどん欲で、いつもころころと笑って冗談ばかり、とてもたまらないわ。私はあんなじゃなかった。十代の初めといえば、読書が唯一の楽しみだったわよ」

頭では自分がいけないんだとわかっていても、心の奥底では失望していました。私はそんな自分を嫌悪しましたが、私にとって娘は、全くもって不可解な存在でした。

そのような気持は、口に出さなくてもすぐ子供に伝わるものです。遅かれ早かれ娘は私の気持を知って傷つくだろうと思いました。そしてそんなにも薄情な自分が苦しくてたまりませんでした。失望するのはおとなげないとわかっていましたが、娘をどんなに愛していても、それでも私の心は変わりませんでした。

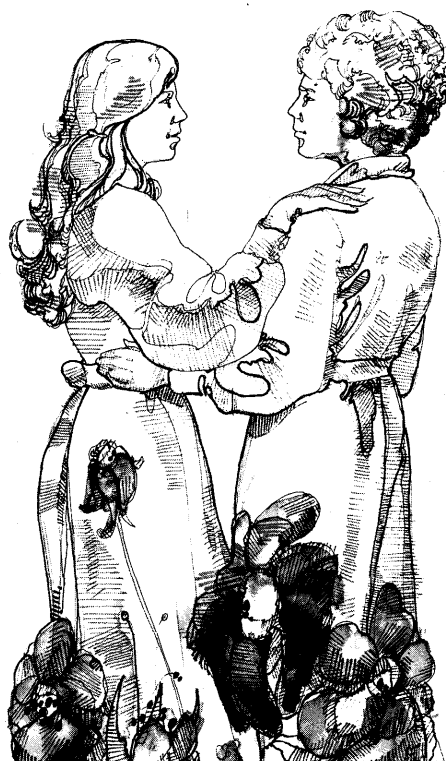
それから何週間もの間、家の者が眠って静かになった中で、ひとり私は天のお父様の前に理解を願って祈りました。娘を永遠にわたってよく知り、愛しておられる御方の前に、頭を垂れて助けを呼び求めたのです。

そうしたある朝まだ早いときに、ベッドに寝ていて何かが起きたのです。夢を見たのだろうと思ったのですが、私は夢ではなかったと確信しています。ちゃんと目がさめていました。数秒ほどの間に、キャシーと私がこの世に来る前、霊界にいたときの様子が脳裏を走ったのです。ふたりはすっかり大人の女性で、腕を組み、にこやかに見つめ合っていました。ふたりは親子というより姉妹のようでした。自分の姉と比べてみると、そのときのキャシーはずいぶん違っていているなと思いました。でもキャシーに、私と同じになってほしいとは全然考えませんでした。私たちがこの世を去るときの姿も浮かんできました。キャシーと私は、とても仲良しな親友同士の母と娘でした。

ある言葉が力強く胸に迫ってきました。「どうして自分の個性を娘に押しつけようとするのか。ふたりの違いを喜びなさい！」ほんの数秒だったのですが、そのひらめき、悟りは、ほかの何からも得られないものでした。こうして私の心は変わったのです。

私の心は、新たな感謝で一杯になりました。どんなに頑張っても自分にはできないと思えた心の転換、主は私のためにそれをして下さいましたのです。

(ジェーン・パリッシュ・コビー 主婦であり8児の母である姉妹は、現在オーストラリア・メルボルン伝道部に働いている。夫のジョン・M・R・コビー兄弟は伝道部長である。)



断食をせよ

フランク・エイドロット

日曜夜のファイアサイドで話をし、家に帰ろうとしていたときに、私は断食をせよという勧めを感じました。理由が思いあたらないのでそのときは別に気に留めなかったのですが、翌朝いつになく早く目がさめて、まとも断食を始めよという勧めを感じました。そのときの感じが強烈だったのでとても無視することができず、それで私は断食を始めました。

その日役所で静かな細い警告の声が「翌日あなたは解雇される。しかしそれは結局好都合になるから、怒ったりろうばいしたりせず冷静にしていなさい」とささやきました。その日一日中、警告の声はそのことを繰り返していました。私は胆を据えてそのときを待とうと思いました。

しかし心は混乱していました。啓示を受けたのは確かでも、なかなか信じられなかったのです。人からはよく君にはうってつけの仕事だ、職はたしかに安定していると言われ、珍本、写本の司書という仕事が自分でも気に入っていたので、やめるつもりは毛頭なかったのですが、みたまの声は拒否できません。

次の朝、仕事にかかって1時間もしないうちに、私は上司の部屋に呼ばれました。そして2週間後に免職のつもりだと聞かされました。彼はひと悶着を覚悟していた様子でしたが、主は私に用意をさせていて下さいました。

私は州の公務員なので即座に解雇にはならず、別の部の仕事のない役職に転属させられました。上司は、あってもなくてもよいような部署に無理して居すわるよりもあきらめてもらいたいと考えていました。しかし私は神様からの指示を守って、役所の一番新参の秘書さえ自分よりは意義のある仕事をしているときに、自分も何かの役に立とうと努め、できる仕事を搜しました。

別の仕事につこうともしましたが、私の分野には職がないようでした。落胆は絶望に変わり、私は毎日、「いつもうつと良い仕事につけるのですか」と祈りました。

教義と聖約の121章に出ているリバティー牢獄の予言者ジョセフの嘆願を読むと、心が慰められました。そして聖霊の導きをもっと信頼しなければならぬと教えられ、私はみたまによって辛抱するように励まされました。

4月のある日、私は地元の大学のかんりの実力者に会ってみるよという靈感を受けました。彼は私を丁重に迎え、職を搜していることを知ると、私を雇いたい意向で、考えている部署が空席になるまでこのまま待っていてくれ

ということでした。希望が見えてきました。

すぐにも彼から連絡があるものと思っていたのに、私の信仰の試しはまだ終わりませんでした。ひとこともなしに5ヵ月がだらだらと過ぎました。私は仕事に何度も、図書館の書棚のかげで祈り、慰めを求めました。しかしワード部の監督会が新しくなって私が引続き第二副監督に召されたとき、明るい日は間近いぞとはっきり感じました。そのしばらく後で祈っていたときに、慰め主の静かな声が、希望を持ちなさい、苦難の終りは近いとささやきました。

8月下旬になると友人と2時間の面接をしました。が、そのとき仕事の話は出ませんでした。しかしその2日後、彼から電話があって自宅に呼ばれました。私は出かける前に祈り、それまでに自分が受けてきた祝福に感謝しました。立ち上がったときには、仕事を得られるという確信がありました。家に着くと、彼は私の新しい仕事を説明してくれました。

苦しみ悩んだ7ヵ月間と霊的な導きを振り返るとき、厳しかった苦難が私を霊的に強くし、主に近い生活をするこの価値を教えてくれたことがわかります。

(フランク・エイドロット 著述業、ミズーリ・カンサスシティーステークス部ローレンスワード部日曜学校教師、ステークス部宣教師)

ささやき声で 話したのです

マイナ・T・バーニン

それは、私たちが教会のインディアン学生紹介制度を通じて10歳のウェインを我家に引き取ってから1週間後の出来事でした。ウェインは賢いかわい少年でしたが、御多分にもれず、ほかの子たちに自分を証明してみせなければなりません。彼は少年たちとよくけんかをし、一番強い子にも負けませんでした。

そんなウェインの担任の先生から電話が来たのです。先生は学校でウェインとの間に問題があると教えて下さいました。ウェインは先生方に対して乱暴を働くということでした。それは大きなショックでした。自分の子には一度もなかった問題なので、私は動転してしまいました。もう頭に血がのぼってしまって、ウェインが学校から帰ったらどう言おうかと、その下げいこを始めました。私は大ごとになる前に是非でもくいとめなければと自分に言い聞かせました。

優先順位を決めて 「理想のあなた」に

ジャネス・R・キャノン

愛する姉妹たち、私たちはだれでも立派な人になりたい、教会の責任を立派に果たしたいと思っています。教会の女性の指導者である人にとって、よりすぐれたものをめざすことは価値ある立派な望みと言えましょう。私たちは卓越の模範を示すように呼びかけられています。

ではどんな種類の卓越をめざすのでしょうか。私たちに自由意志の原則が主から与えられています。主は毎日私たちに選択の場を備えておられます。たいていの人には簡単な善と悪との選択に限らず、善と善との間の選択についてもそうです。「もし何にても徳高きこと、好ましきこと、よき聞えあること、あるいは褒むべきことあらば、われらはこれらをたずねもとむるものなり」(信仰箇条第13条)でも姉妹たち、私たちは同時に全部を求めることはできません。「すべての事には季節があり」(伝道3:1)と言われている通りです。「なすに足る事なら立派にやるだけの価値がある」という格言があります。でもリチャード・L・エバンズは、もっと大切なことがあったために中断されて立派にできなかったことなら、またやってみる価値があるともしました。

卓越をめざすとき、優先順位を決めることが成功の秘訣です。大切なことをあとまわしにしてしまった人たちの例をふたつあげてみますので、何を優先するか決める上で参考にして下さい。

サウルの娘でダビデの最初の恋人であり妻であったミカルの物語は、旧約聖書の中でも特に感動的で、私たち女性にひとつの教訓を与えてくれます。ダビデとミカルの愛には少しの疑いもありますが、サウルは、ダビデが宮廷でまだ青年だったときに、そのことを知りました。

「しかしサウルは見て、主がダビデと共におられること、またイスラエルのすべての人がダビデを愛するのを知った時、サウルは、ますますダビデを恐れた。こうしてサウルは絶えずダビデに敵した。」(サムエル上18:28、29)

サウルはそれでもミカルをダビデの妻とし、ヨナタンのとりなしを喜びました。そしてダビデが最後に、怒るサウルの殺害の手から逃れるとき、警告して逃げる手びきをしたのが、妻のミカルでした。それから年月がたって、ダビデの軍勢が勝ち、サウルが死ぬと、ダビデは妻ミカルの引き渡しを求め、ふたりは再会しました。

悪いことは重なるもので、ウェインは隣りの子とけんかをして帰宅が遅くなりました。バス停から道々ずっとけんかをしてきて、我家の玄関先の芝生の上でふたりは取っ組み合いを始めました。私は少しの間見ていましたが、けんかがひどくなってきたので、ドアの所へ行ってウェインを呼びました。

彼は知らんふりをしました。もうひとりの少年に背を見せたくなかったのです。それを見ている私は、ますます怒りがつのってきました。私はウェインに、家に入りなさいと命令しました。かっとなっていたので、これではさっきの問題は話せないと思い、読書をしなさいと言ってウェインを自室に行かせました。

私は怒りに震えながら自分の寝室に退き、ひざまずいて祈りました。問題をどう処理したらよいかの知恵を求め、みたまによって言うべき言葉がわかるようお願いしました。祈り終えて立ち上がると、暖かい静かな気持ちが広がるのを感じました。その気持は頭から始まって、ゆっくり足先まで満ちて行きました。

ウェインの部屋のドアを開け、彼が本を手にしてベッドのへりにすわっているのを見たとき、さまざまな思いが私の頭をよぎりました。その部屋にすわっているウェインは場違いに見えてきました。彼はここに来るまで、野原を自由にかけまわっていたのです。瞬間私の胸には目の前のひとりぼっちの少年に対する思いがこみあげてきました。なつかしい土地から引き離されて別世界に投げこまれ、まるで違った規則のもとでの生活を強いられている少年。彼は仲間の少年たちに、それよりすぐれはしなくても、せめて同じ位の良い子であることを示して見せなければならなかったのです。

私はベッドのふちに彼と並んで腰かけました。口を突いて出た最初の言葉に、私は自分でも驚きました。「ウェイン、怒ってごめんなさいね」と言ったのです。私はそれから、先生からの電話のことを話し、説明の機会を与えてあげました。とてもよい話合いができました。ウェインは私を信頼してくれました。私たちはほんのささやくような小声で話をしたのです。その話し方は、私が下げいこをしたものとはずいぶん違っていました。本当に霊的な経験で、ウェインと私の関係は何よりもそのことでとてもよくなりました。

祈ることのありがたさと、求めたときに私たちを導いて下さる聖霊の賜を感謝しています。

(マイナ・T・ペーニン 主婦で教師の経験がある。ユタ・ウェストサンデースターキ部初等協会副会長、サンデー第13ワード部扶助協会家庭訪問教師主任)



ダビデは契約の箱を持ってエルサレムに上りましたが、それは道々音楽や踊りを伴う歓喜あふれる一大パレードでした。聖典には、「そしてダビデは力をきわめて、主の箱の前で踊った。その時ダビデは亜麻布のエポデをつけていた」（サムエル下6：14）と書かれています。亜麻布のエポデは儀式用の衣装で、かなり短いことがわかっています。ミカルは窓から、夫が亜麻布のエポデを着て行列の先頭に立って踊るのを見て、はしたないことをするものだと、たいへん恥ずかしく思いました。こう書かれています。

「ダビデが家族を祝福しようとして帰ってきた時、サウルの娘ミカルはダビデを出迎えて言った、『きょうイスラエルの王はなんと威厳のあったことでしょう。いたずら者が、恥も知らず、その身を現すように、きょう家来たちのはしためらの前に自分の身を現されました。』（サムエル下6：20）

その言葉が、勝利に酔う激しい気性の男性にとってどんなにショックだったか、想像できると思います。

ミカルは王の娘でしたから、王は威厳をもって振舞い、服も行動も人にまさる模範であるべきだということを知っていました。彼女は間違っていないでした。でも残念なことに、優先したものが間違っていました。

ダビデはたいそう傷つき、怒りました。そしてこう返答しました。「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたしを選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ。わたしはまた主の前に踊るであろう。」（サムエル下6：21）

このミカルの物語は、次のような寂しい言葉で結ばれています。「こうしてサウルの娘ミカルは死ぬまで子供がなかった。」（サムエル下6：23）

もしもミカルが、夫というものは愛情をもって穏やかに迎えるべきだと知ってさえいたなら、そして人間関係がとても大切なことを理解していたなら、彼女は思いとどまって、愛情の気転と模範でダビデの振舞いを改めさせたことでしょう。姉妹たち、人間関係、それも特に愛する人々との良い人間関係を、優先順位の先の方に置いて下さい。

ミカルの父サウルの経験はミカルの物語よりもなじまれています。そこには何よりも最優先させるべき大切なこと、主のみ言葉への従順が示されています。

主は、アマレクに対する勝利をサウルに与えたもうたときに、アマレク人とその家畜をみな滅ぼせという命令を出されました。でもサウルには自分の考えがありました。彼は、自分の判断が最善ではないかもしれないと考える謙遜さに欠けていました。羊などの家畜を全部殺すのはよくないと決めつけたのです。最上の家畜はぜひとも生かしておくべきだと思いました。サウルは若いときに羊飼いでしたから、家畜の善し悪しがわかりました。それに、民がアマレク人の上等な家畜を生かしてほしいと望み、王は民の声を聞くべきだとサウルは考えました。

そして、生ける予言者サムエルが主のみ言葉に従わなかったことの説明をサウルに求めたとき、彼は最上の動物を殺さなかったことにまた別のもっともらしい理由を考えつきました。しかるべき儀式で主に素晴らしいいけにえを捧げるというのです。でもサムエルは、「従うことは犠牲にまさり、聞くことは雄羊の脂肪にまさる」（サムエル上15：22）と言いました。そして、サウルは優先するものを間違ったために、イスラエルの王の地位を主に取り上げられました。

生ける予言者たちの口から出る主のみ言葉は、自分の考えがどんなに立派に思われるときでも、それよりも優先します。また、卓越をめざす私たちが何にもましてまず優先させなければならないのが、主のみ業です。

学業に、家事に、扶助協会に、またその季節にあった価値ある努力のすべてに、卓越を求めるようお勧めしたいと思います。でも、常に主の生ける予言者の言葉に耳を傾け、靈感によって優先順位を決めることを忘れないで下さい。

現在この教会を導いている人たちが生ける予言者であることを証いたします。私たちの救い主であるイエス・キリストが生きて、このキリストの教会を予言者たちを通じて導いておられること、そして私たちは従順と愛により、研究と祈りと耳を傾けることによって、よりすぐれたものをめざす上で自分は何を優先させるべきかを決めるための靈感が受けられることを証いたします。

ジャネス・R・キャンノン姉妹は扶助協会中央管理会の教育担当副会長である。

国際伝道部の 発足

流動的な今日の社会にあって、教会組織のある地域から離れた地に住んでいる教会員がかなりいます。このような教会員との接触を維持するために、1973年に国際伝道部が設立されました。十二使徒評議員会補助のW・グラント・バンガター長老がこれを管理しています。

バンガター長老の報告によると、国際伝道部には現在世界35ヵ国、約1,500名の会員が登録されているということです。この伝道部に属する会員との接触は、通常、その人が正規のワード部、支部を去る前、あるいは、その人が遠隔地に移ったという知らせを監督、支部長から受けた時点から行なわれます。

国際伝道部は、教会の発展状況を報告したり、教会プログラムに参加できるよう援助したりすることによって、会員との交流をはかっています。

国際伝道部は、所属する会員の記録、子供のバプテスマやその他の儀式を施す場所の手配について責任を負います。また、その地域にほかにも末日聖徒が住んでいるかどうかについても知らせます。

教会が組織されていない地域に移ることになっている教会員は、国際伝道部に通知してください。そうすることによって、記録が移され、教会と引き続き連絡を取ることができます。

遠隔地に住んでいる教会員を御存知の方、または神権指導者は、国際伝道部 (50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150 U.S.A.) に連絡してください。

その人の氏名、移転先、これまで住んでいた地、ワード部、ステーク部、地方部を明記してください。

堕胎に関する 声明

大管長会は、堕胎に対する教会の姿勢を再び強く打ち出すため、次のような声明を発表しました。

「当教会は堕胎に反対しており、ごくまれな場合を除いて堕胎をしたり、堕胎手術を受けたりしないように教会員に勧告している。まれな例外とは、資格ある医師の診察の結果、母親の生命や健康が危険にひんしていることがわかった時、あるいは強姦によって妊娠し、母親に深刻な衝撃が残っている時である。このような場合も、監督または支部長に相談し、また祈りによって神の同意を得てからにすべきである。

堕胎は今日の最も忌まわしく、罪深い行為の一つである。なぜなら、この恐ろしい堕胎容認が、性的な不道徳をもたらしめているからである。

堕胎の罪を犯した教会員は、事情によっては、教会の評議員会によって懲戒処分を受ける。この深刻な問題を取り扱うにあたっては、教義と聖約59章6節に述べられている主のみ言葉を心に留めておくといふ。「汝盗むなかれ。また、姦淫を犯すなかれ。また人を殺すなかれ。また何事にもこれに類することを為すことなかれ。」

これまでの啓示によれば、堕胎は、悔い改めれば赦しを得ることのできる罪である。



世界的な規模で9回行なわれる
作詞作曲コンテスト

扶助協会は1975-76年度作詞作曲コンテストの入賞者とあわせて、1976-77年度の世界的なコンテストを発表しました。

1976-77年度のコンテストについて、扶助協会会長は次のように語っています。「扶助協会の作詞作曲コンテストが、教会の全世界の姉妹たちの間で初めて行なわれることになりました。文化が異なるため困難な点もあるかと思いますが、それ以上に世界的に行なわれるこのプログラムは価値あるものだと思います。扶助協会会員のほとんどが英語を話すため、英語以外の歌は英訳し、原語には標準的な発音記号をつけていただくことになっています。今年度のテーマとしては、「女性の影響力の輪」などのように、扶助協会ノーブー記念像を中心にして考えてください。コンテストの規定については、新しい『扶助協会の手引き』p. 42、43を御覧ください。」

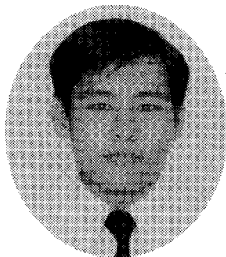
◇ 公 告 ◇

規則第18条の定める手続きを経て、下記の通り教会支部用地を買収しましたので宗教法人法第23条の規定によって公告します。

昭和51年3月26日

宗教法人「末日聖徒イエス・キリスト教会」 代表役員グレン・R・ハンディー
会員その他利害関係人各位

北九州支部用地	昭和50年10月16日	札幌第2支部用地	昭和50年12月26日
尼崎支部用地	11月4日	岡崎支部用地	12月29日
名古屋第2及び第7支部用地	11月20日	東京神殿用地	昭和51年3月24日



両親に感謝したい

日本東京伝道部

宣教師 坂 本 正 樹

私は今、私の両親に、本当に感謝したい気持ちでいっぱいです。この気持ちを紙に書き尽くすことは不可能です。できることなら、この感謝の言葉を直接、父と祖父と、そして、母に伝えることができたなら、と思います。

私の家族は祖父と父と母と私の4人でした。家族はまだ、教会員ではありませんが、私が教会に行くようになったことを本当に喜んでくれていました。それと言うのも、私は高校生のとき、教会を知る前、ひどい不良学生だったからです。クラブ活動をやっていたときはまだ良かったのですが、引退すると、タバコや酒、けんか、悪い遊びにふけり始め、学校も退学させられそうな状態でした。それにノイローゼになり、自殺を考えたり、家出をしたりして、両親に心配のかげどおしでした。そんな私が急に180度変わってしまったので両親はホッとしたようでした。私を本当に信頼してくれるようになりました。勉強も特に英語が好きになり、教会の大学で勉強したいと思い、両親に話すとき、教会の監督と話して、自分で学費を作るのなら良い、と許してくれました。ハワイのブリガム・ヤング大学に入り、仕事としてL. T. M. で日本に来る宣教師に日本語を教えている内に伝道に出たいという気持ちが次第に強くなりました。そこで両親に手紙を出すと、監督と話して、「正樹がそれが正しいと思うのだったらそうさせてやりたい」と言ってくれました。私には兄弟がいまないので両親はきっと淋しくなるだろうとは思いましたが、今しかできることはないと感じ、出る決心をしました。伝道に出る前、しばらくの間、両親にこの教会についてよく知ってもらおうと、スライドを見せたり、パンフレットを使って、自分の信じていることを説明したりしました。両親は一応の理解を示してくれましたが、やはりまだ、信じることはできないようでした。そして、伝道の召しが来ました。今までどうしてもっと両親に教会について話さなかったのか、と悔やみました。時間はあったのですから。伝道に出て、毎週両親に手紙を書きました。

「私たちは今、素晴らしい家族にイエス・キリストの福音を教えています。私も帰ったらきっと、幸福な家庭を作れるように努力したいと思っています。」

今まで家族として、あまり話し合うこともなく、ただ個人の集まりという感じだったので、私の手紙に両親は、特に母は喜んでくれたようでした。母からの手紙の中には、「母さんもお前が帰ってきて、本当に楽しい家庭になることを楽しみにしています」と書いてありました。

その母が7月27日に死にました。私が伝道に出て4カ

月あまりたった日のことでした。私はどうして良いかわからず、伝道部長の指示に従おうと思い、連絡すると、伝道部長はルカ伝9章59節から62節までを引用され、「あなたの召しは、現世のことだけではなく、来世にもかかわる神様の召しです。よく考えてください」と言われました。予期していた答えでしたが、まだ自分自身には帰りたいと思う気持ちがありました。それで家に電話をかけて父と話そうと思いました。「何があってもすぐ帰って来い」と言われるだろうと思っていましたが、父の口からは信じられない言葉が返って来ました。

「帰って来なくてもいいから、こちらのことは心配せずに、お前はただ自分の信じている信仰の道を続けて行ってくれ。そして、そちらで母さんのために祈ってやってくれ。」

私は父のこの短い言葉の中に信仰の薄い自分を見るような思いがしました。何か大切なことを忘れていたように感じたのです。そしてそのとき、伝道部長の引用された聖句の意味がよくわかってきました。神様から召された宣教師がどのような人であるべきか、どのように神様に、そして主に従うべきなのか。それがわかったような気がしました。親戚の中には「ひとり息子のくせに親の葬式にも出ないで」と言う人もいたそうです。しかし、母が死ぬ前にある親しかった人に言った言葉を聞いたとき、私は本当に、私の両親は私のしていることを理解してくれていたのだということを知りました。

「死んでもまた、親子が一緒に暮せるんやって、正樹が言うとおったから私は何も心配してへんねん」

母はきっと今、霊界で福音を今度ははっきりと聞いていると思います。親と子が互いに信じ合える。本当は当然のことなのでしょうが、今の世の中ではむずかしいことになってしまいました。そんな中で、私は私の両親に心から感謝しています。また、伝道という経験を通して多くのことを見、知り、考え、成長していけることに感謝しています。

これからもっとたくさんの日本人宣教師が必要になると感じています。日本人はやはり、日本人の手で伝道してこそ、より大きな祝福が与えられるのだと思います。多くの若い兄弟姉妹が、そのために準備されるよう期待しています。

私は神様が生きていらっしゃる、私たちを導いてくださっていることを証します。全部、愛するイエス・キリスト様のお名前によっていたしました。アーメン。

実に主は生きたもう

日本名古屋伝道部
沼津支部 手塚 昭夫



1970年の第一週の朝、私と長女は、近所にできた新しい教会の門をくぐりました。ちょうど神権会の最中でした。ふたりの宣教師に迎えられ、その集会に出席しました。そして一日を教会で過ごし、モルモン経を手にして、帰宅しました。当時私は35歳で、プロテスタントの教会の会員でした。両親もクリスチャンであるため、私は祈りのある家庭で育ちました。ところが19歳のときに、私はアルバイト先の事故で、右足を切断してしまいました。それからというもの、父母の30年間の信仰生活など、あらゆるものに疑問を持つようになり、酒を飲み、タバコを吸い、給料はすべて、酒やタバコや遊びに消えていくような生活が続きしました。結婚し、子供が生まれたのはその頃です。でも生活は少しも改まりませんでした。酒を飲んで暴れる日々が続きました。生活は乱れ、夫婦、親子間はバラバラでした。でも、このような生活に満足していたわけではありません。子供の成長を見るにつけ、なんとかしなくてはと、いつも思っていました。両親の行っている教会へ行き、牧師の話を聞き、何かを見出したいと努力してみました。けれども、心に平安を感じることはできませんでした。その上、酒やタバコをやめることもできませんでした。希望のない日々、いがみ合うことしかない家庭、これではいけない、これではいけないの毎日でした。

妻とふたりの娘が、買物先でふたりの外人に逢い、チラシをもらって来たのはそのような時でした。英語を無料で教えてくれるというので、私は上の娘とふたりで新しくできた教会の門をくぐったのです。そして10月第二週の土曜日からレッスンを受けるようになりました。しかし聞くこと、知ることすべてが新しく、今まで行っていた教会の教えとの違いに驚いてしまい、ずいぶん宣教師を困らせたことと思います。でも、私の疑問を一つ一つ解決してくれる宣教師の温かい見守りの内に、12月25日の早朝6時に、家族4人そろってバプテスマを受けました。それからというもの、本当に考えてもみなかったような生活が始まりました。もちろん酒もタバコもかけ事も全くない生活です。酒を飲まなければ、夫婦のいがみ合いも少なくなります。

翌年の2月14日、伝道地が支部になり、第一副支部長の召しを頂きました。人生に素晴らしい充実したものを見出すことのできたこのときの喜びは、言い表わしようありません。教会員になって一年後、支部長の召しを頂き、地

方部からたくさんのチャレンジが与えられました。その中に、必ず神殿訪問をするようにという強いチャレンジがありました。当時、母がガンで入院していたため、経済的に、またいろいろな面で問題が起きてきました。でも私たち夫婦は、神殿行きの準備を進めました。8月18日の出発を目標に頑張っている私たちにまたしても問題が起きました。母の入院に続き、姉が3歳の息子と共に事故に遭い亡くなったのです。これが8月8日のことです。そこでまた神殿訪問がややくなりました。でも私たち夫婦は、泣きながら努力し、また兄弟姉妹の温かい励ましにより、8月18日無事出発することができました。心の中では、私たちが帰ってくるまで、母に生きていてほしいと、そればかりを祈っていました。神殿で得た私たちふたりの体験は、なにものにも代えることのできないものでした。これほど神聖で素晴らしい所は、地球上どこにもありません。私たち夫婦は16年目にして初めて、神の前で永遠に結ばれました。このときの感激と感謝は、だれにもわかってもらえないと思います。今までの私の犯した数々の罪を主は赦して下さい、主のみ手の中に私たちを包んで下さったのです。日々感謝の気持ち一杯です。けんかやどなり声の絶えることのなかったこの家庭に祈りがあり、家庭の夕べがあり、讃美歌があります。あらゆる困難に打ち勝つ力を感じながら、妻とふたりで聖典を勉強するときの安らぎをわかって頂けるでしょう。

自分にとって悲しかったことが、益となり、苦しみに遭ったことで、人間について多くのことを教えられました。主と共に歩むことにより、マイナスが幾倍にもプラスに変えられました。こうして主に赦されている者のかけがえのない喜びを知ることができました。主は、傷だらけの私を喜んで受け入れて下さったのです。今の私に、恐れは全くありません。主は生きてましまし、私を約束通り緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われたのです。「たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわいを恐れません。あなたが私と共におられるからです。」(詩篇23:4)

今まで私のために、たくさんの兄弟姉妹が祈って下さいました。今度は私が、人のために祈り、歌い、証をしたいと思っています。主は生きてましまし、大管長を通し私たちを指導して下さいることを、心から証します。

改宗の喜び

日本札幌伝道部

札幌第4付属支部 渡 辺 恒 孝



1974年2月のある寒い冬の夜のことでした。ちょうど家族（妻、子供ふたり）が地方へ出かけ、私がひとりで家におりましたときに玄関の鴨居よりも顔が上に有る位大きなふたりの外人の方がベルを鳴らしました。その日はひとりで夕食をしていたので、長い時間お話をすることができませんでした。外国の人でしたので何となく話がしたくなりました。彼らは、「モルモン経」という本を出してこの本を読んで下さいと言いましたので1冊買い求めました。私は学生の頃からカソリック教会で聖典の勉強をしており、母が亡くなってから間もなく洗礼を受けていました。それから数年間、毎週日曜日に教会に行っていました。社会に出て働くようになってからはもうひとつ物足りなさを感じ、年に数回しか教会へ行くことがなくなりました。こんな毎日を過ごしているうちにいつしか教会からも遠ざかるようになりました。そして結婚をして10数年が過ぎていました。子供の頃に「モルモン教会」という言葉を聞いた記憶はありますが、どんな教会か全然わかりませんでした。けれどもこの教会にめぐり逢うことができたのは不思議なことでした。宣教師の方が私の姉妹や子供たちに会ったのは次の週でした。姉妹はそのときから大変興味を持つようになり、それから毎週日曜日には姉妹と子供たちのレッスンを始めました。その間にも私は祈りをする宣教師たちの姿を見て、この人たちはこんなことをして果たして神様なんているのだろうか、どんな良いことがあるのだろうかなどと考えて姉妹や子供たちのレッスンをただながめているだけでした。また、宣教師には会いたくないと言って帰ってもらったことも何度かありましたので、姉妹や子供のレッスンは長くかかりました。そのうちに姉妹や子供たちが教会へ行くようになりましたが、私はどうせそんな所へ行ったら良いことなどないし、今の生活の方が楽しいから行くことはない」と姉妹に言いました。

それからしばらくたった1975年の夏、姉妹が東京へ行ってみたいと言い出しました。理由を尋ねると、教会の予言者が東京に来るということでした。私はそんなに素晴らしい人が来るのなら行って来なさいと言いました。大会を終えて帰った姉妹が東京での出来事をいろいろと話してくれました。私はその話を聞いているうちにそんなに素晴らしい日が続いたのかと思いました。私の姉妹は地域総大会に行く前と帰って来てからとは何か別人のように思えました。大会を契機に、私の家庭は少しずつ変化してきました。姉妹は教会のことをよく知っており、質問をしてもすぐに

答えを出してくれましたし、お祈りも何となく素晴らしいと思うようになりました。そしてモルモン経も読むようになりました。そのときはまだ「知恵の言葉」などは知りませんでしたので、酒を飲みタバコを吸いながらレッスンを始めました。そして姉妹や子供たちのレッスンもあと数回で終わるとのことでした。私の心の中に焦りにも似た気持ちが出てきたのはこの頃のことです。姉妹と子供たちが1年数ヵ月にわたって教会のことを学び、家庭の中でも祈りをし、そして安息日には教会に集っているのに、自分だけが取り残されたような非常に淋しい気持ちになったのです。それから私も、口には出しませんでした。ひとりで祈りをすることにしました。今まで自分が考えていた、また行っていたことより何か素晴らしいことが起こるような気がしました。あのときのことは今だに忘れることはできません。そして私はレッスン中に、あれほど好きだった酒、そしてタバコ、茶などをやめると宣教師に約束しました。でも、本当に守れたときは自分自身信じられませんでした。

こうして私たち家族は1975年9月13日にバプテスマを受けました。一番喜んでくれたのは姉妹でした。そして宣教師の方でした。あの冬の寒い夜からちょうど1年半でした。特に私の姉妹にはどんなに待ち遠しい日だったでしょう。私をここまで力づけてくれたのは姉妹です。そしてこの素晴らしい福音を教えてくれたのは多くの宣教師の方々です。今でこそ思います。なぜもっと早く私の所に神の子羊をつかわしてくれなかったのだろうか。このような素晴らしい教えがあり、私たちの家庭がこんなに素晴らしくなろうとは夢にも思わなかったからです。私の家庭は成長しました。この教会は真実の教会であり、スペンサー・W・キンボール大管長は生ける予言者であることを証致します。私と家族のみんなが本当に素晴らしい家庭を持っていたことを証します。私は教会に入ってからまだ9ヵ月余りですが、先日地方部大会の席で大神権と共に「地方部伝道部長」という素晴らしい召しをいただき本当に天の父なる神様に感謝致します。世の人々が本当に幸福に過ごせるように願っております。また私は、「末日聖徒イエス・キリスト教会」の会員であること、そして多くの人々に福音を宣べ伝えることができますことを誇りに思っています。

毎日父なる神様の力と祝福がありますことを感謝申し上げ、すべてイエス・キリストのみ名を通してお話致しました。アーメン。

「牧場に居る時は、あなたたちの家畜の群について神に祈れ。家に居る時はあなたたちの家族全体について朝も昼も晩も神に祈れ。あなたたちの敵の力を防ぐことができるように神に祈れ。一切の義しいことに敵対する悪魔を防ぐことができるように神に祈れ。……こればかりではない、あなたたちが一人で部屋に居るときも、秘密の所に居るときも、また野に居るときも心にあることをうち明けて祈れ。声をあげて主に祈らない時でも、自分の為また自分のまわりの人々の為を思ってたえず心の中で主に祈れ。」

（アルマ34：20－23，26－27）

